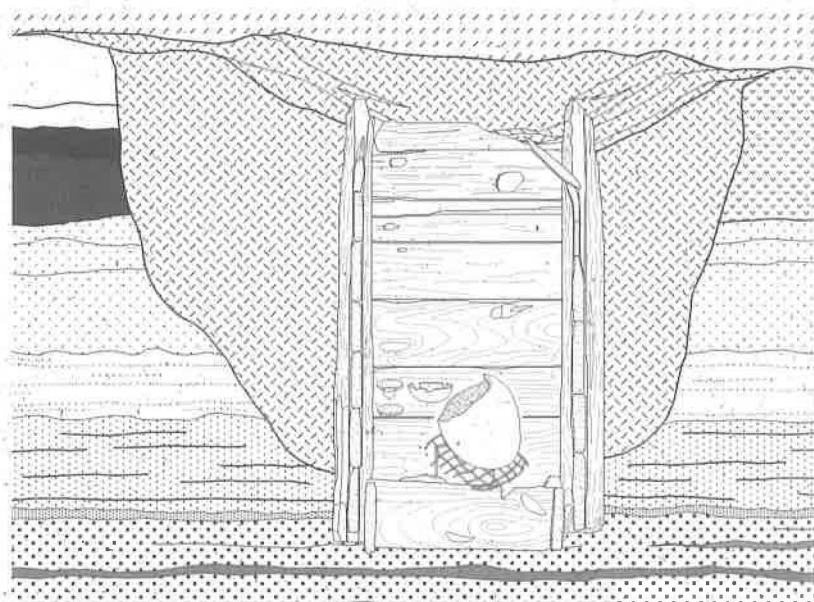


# 船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書



2001.12

財団法人 東大阪市文化財協会

船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書

2001.12

財団法人 東大阪市文化財協会

## 例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が実施したマンション建設に伴う船山遺跡第3次発掘調査および共同住宅建設に伴う神並遺跡第23次発掘調査整理事業の報告書である。
2. 船山遺跡第3次発掘調査は株式会社大京から依頼を受け、東大阪市六万寺3丁目635-1,636-1,642番地で1994年2月21日～同6月6日まで現地調査を実施した。神並遺跡第23次発掘調査は木積一元氏から依頼を受け、東大阪市西石切町1丁目1-1,5-1,6,7-3で1999年7月8日～同8月30日まで現地調査を実施した。
3. 現地調査および整理作業にかかる費用は、それぞれの事業の開発者が全額を負担した。
4. 船山遺跡第3次発掘調査の現地調査および報文の執筆は財団法人東大阪市文化財協会・別所秀高が、神並遺跡第23次発掘調査は同・井上伸一がこれを行った。
5. 現地における測量基準のうち水準高は東京湾中等潮位（T.P.）を、平面座標は1952年の国土調査施行令で定められた国土平面直角座標第VI系を用いた。
6. 現地調査にあたっては、開発者および施工業者の関係各位、調査地近隣住民の御協力を得た。心より感謝いたします。また、現地調査および整理作業には以下の補助員が参加した（五十音順）。

（船山遺跡第3次発掘調査）

荒川晶子 石田知弘 入山彰正 大川美由紀 太田貴子 大音章代 金本英二 小堀和彦  
鈴木裕次 西川 潤 西村和浩 高山幸治 武知千恵子 楨本義憲

（神並遺跡第23次発掘調査）

柴田由花子 寺田文子 森澤匡晴 山下阿須佳

## 第1章 船山遺跡第3次発掘調査報告

### 1.1 はじめに

船山遺跡は生駒山西麓の東大阪市六万寺1,2,3丁目にかけて広がる遺跡である（図1.1）。1970年ごろの宅地開発にともなって周辺から土師器や須恵器が採集されたことで周知された。遺跡推定範囲内には式内社の一である梶無神社が鎮座している。梶無神社はもとは四条字梶無に鎮座し、後にこの地へ遷座したと伝えている（中河内郡役所編1922）。

船山遺跡ではこれまでに2回の調査が実施されている（図1.2）。1985年に実施された第1次調査では鎌倉時代の瓦器椀や6世紀後半ごろの土師器、須恵器、これらがともなう溝が見つかった。また、僅かではあるが弥生時代後期の土器片や縄文時代後期の土器片が出土している（原田1986）。1993年に実施された第2次調査では15世紀ごろの瓦や石硯が出土しており、周辺に寺院などの施設が存在していたと想定されている（金村1994）。

いっぽう、1993年に東大阪市六万寺3丁目635-1,636-1,642番地（図1.2）で株式会社大京によってマンション建設が計画された。建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置するため、東大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、弥生時代後期や古墳時代後期の土器が多数出土した。このため東大阪市教育委員会と開発者である株式会社大京は事前協議を重ね、建設工事によって遺物・遺構が破壊されると予想される建物基礎部分494.2m<sup>2</sup>（図1.4）について発掘調査を実施することで合意した。財団法人東大阪市文化財協会は開発者からの委託を受け、1994年2月21日～同6月6日まで現地での発掘調査を実施した。現地では掘削残土の場外搬出ができなかったことから、東半部を掘削残土置き場に西半部を先行して実施し、西半部調査終了後、掘削残土を西半部に移して東半部の調査を行った。また、すべての調査終了後、断続的に遺物整理作業を行った。

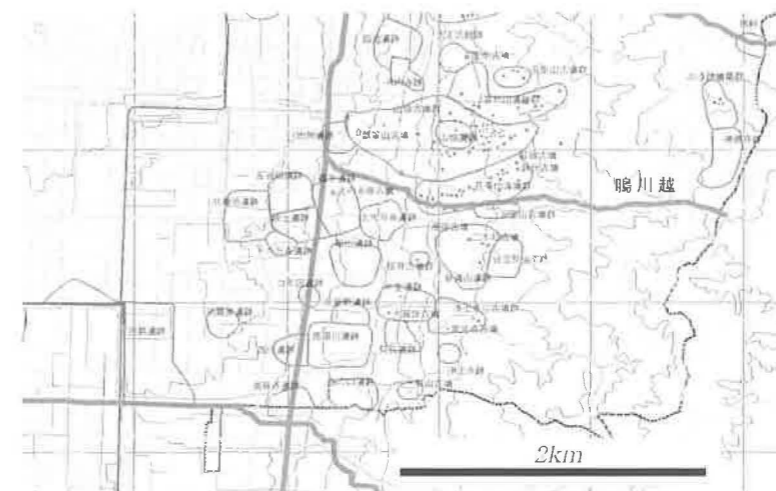


図1.1 東大阪市東南部の遺跡分布図

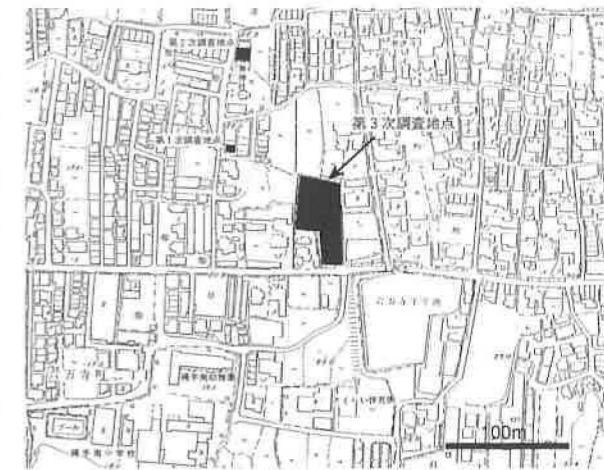


図1.2 調査地点。



図1.3 調査地西半部での機械掘削の様子。

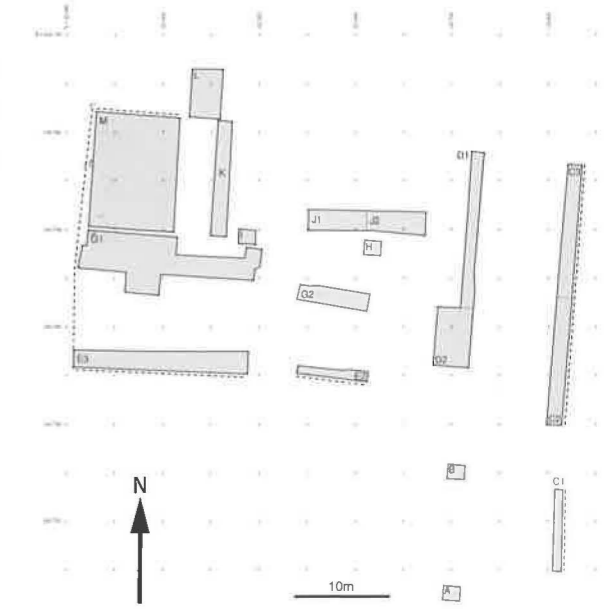


図1.4 調査地の地区割り、破線部は地層断面図を掲載した箇所。

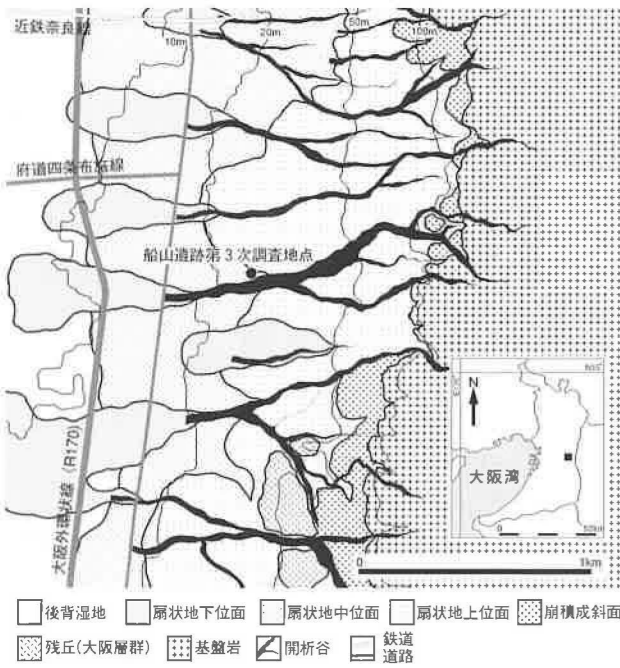


図 1.5 船山遺跡周辺の生駒西麓地域の地形分類 (別所 1999 を改変)。

## 1.2 船山遺跡周辺史と生駒山西麓の地形

生駒山地は大阪府・奈良県境を南北に連なる逆断層地塊で、最高峰は生駒山の642mである。生駒山地の西縁には生駒断層があり、そのさらに西側には階状扇状地、後背湿地がある(図1.5)。船山遺跡周辺の扇状地は下位より扇状地下位面、扇状地中位面、扇状地上位面に区分され、それぞれ3世紀以降、4000～5000年前、10000年前以前の堆積物が表層を覆っていると考えられる。船山遺跡はこの階状扇状地の扇状地中位面に立地する。船山遺跡の現地表面の標高は19～30mで、谷口との比高差は70～80m、扇端とのそれは12～20mである。扇状地中位面の形成要因は、縄文海進最高頂期直後に起こった一時的な海水準低下や生駒山の急激な隆起、多雨化による山地からの土砂流出量の増加などによって扇状地上位面が大きく浸食され、その下流側に山地から供給された土砂が堆積してできたと考えられるが、いずれの要因も決定的な証拠が得られていない。

いっぽう船山遺跡の周辺には多くの遺跡が分布し、とくに扇状地緩斜面上には密に分布している(図1.1)。この地域では遺構をとまなうような旧石器時代の積極的な人間活動の痕跡はみ

られない。これは後背湿地部では10000年前より古い堆積層や遺構が地下深くに埋没していて見つけにくいこと、旧石器人が活動していたと考えられる扇状地高位面が5000年前の扇状地中位面形成期に大きく浸食されたこと、さらに段丘化した扇状地上位面は後世、とくに古墳時代以降の開発によってそれ以前の遺構を削平したことなどが原因と考えられる。

周辺の遺跡で見出されているもっとも古い考古遺物は縄手遺跡と段上遺跡の縄文時代中期の土器である。1970～1972年にかけての縄手小学校および縄手中学校関連施設の建設工事にもなう調査では、縄文時代中期末～後期にかけての土器や石器とともに、同時期の住居跡や炉跡、土壙墓などが検出された(藤井・原田1971, 藤井ほか1976)。段上遺跡では遺構をとまなわないものの、河道内から縄文時代中期末～後期の土器や石器が出土した(別所2001)。また、五合田遺跡や船山遺跡、馬場川遺跡(藤井ほか1970a, b, 1971, 下村1975, 下村ほか1977, 下村・松田1976, 原田1981, 藤城ほか2000)では縄文時代後期の土器や石器がみついている。低地部の池島・福万寺遺跡では、かつての河内平野の干潟の後背湿地と考えられる堆積層中でまれに縄文時代後期の土器が散見される(國乗・宮路1993)。旧石器時代の遺構と同様に遺跡形成過程で後世に削平された遺跡地をあわせて考慮すると、縄文時代のとくに後期ごろには規模の小さな集落が広範囲にわたって点在していたと考えられる。

船山遺跡周辺ではこれまでに弥生時代中期の遺物や遺構がまとまって検出されることがなかったが、近年楽音寺遺跡では弥生時代中期初頭の土器や石器が溝内から出土した。同遺跡の西側の後背湿地部に位置する池島遺跡では同時期の水田跡が検出されており、楽音寺遺跡に居住した弥生人の食料生産域であっ

たとえられる。段上遺跡では弥生時代中期後半の住居跡や墓が検出されおり、周辺に同時期の居住域や墓域が広がっていると考えられる(別所2001)。

弥生時代後期～古墳時代前期の集落は長期にわたって同じ場所で継続することはないが、山麓域一帯に同時に複数点が点在する傾向がある。楽音寺・西の口・馬場川・貝花・北鳥池・上六万寺・段上の諸遺跡では同時期の遺物や遺構が、山畑遺跡(芋本1993a)や岩滝山遺跡(芋本1993b)では低地との比高差が大きいいわゆる高地性集落と呼ばれる集落跡がみついている。

古墳時代後期の遺構遺物は周辺の遺跡からきわめて高密度で検出されている。5世紀になると扇状地扇端付近には猪ノ木塚古墳(藤井ほか1976)や段上遺跡で小型低墳丘墓(別所2001)が築かれ、6世紀になると山地から扇状地にかけての斜面に横穴をもつ小規模な墳丘墓が無数に造られる。船山遺跡の南東に位置する半堂遺跡では人物埴輪や器財埴輪をとまなう低墳丘墓(大賀世3号墳)がみついている(上野1982, 上野・中西1985)。また、周辺の遺跡では製鉄に関連する炉跡や鞆の羽口、鉄滓や馬飼を示唆するような製塩土器が散見される。古墳時代後期におけるこのような遺構遺物の出現は、柏原市から枚方市にかけての生駒山西麓～枚方丘陵地域で共通して見られる。

船山遺跡の北東2km、客坊谷の谷口から扇状地にかけて広がる客坊山遺跡群では平安時代の基壇跡がみつき、この寺院は15世紀ごろには「尋尊大僧正記」文明九年十月二日条にみられる「客坊城」として機能していたと推定される。ここでは畠山義就と畠山長政の間で練り広げられた跡目争いで義就方が陣取った客坊城が陥落した(同九月二十七日条)ことを示すような多量の焼壁土がみついている(芋本・才原1998)。また、船山遺跡の東1kmの谷口付近に広がる往生院金堂跡には浄土宗寺院である現在の往生院があり、往生院北側の尾根上の平坦地は「河内往生院伝承地」として大阪府古文化記念物等保存顕彰規則により指定されている。この伝承地もまた先の義就の陣所の一つである「往生院城」跡と考えられている。往生院金堂跡の西側に隣接する岩滝山遺跡では平安時代～室町時代の園池遺構や石組墓など、かつての往生院に関連したと考えられる遺構遺物がみついている(芋本1999b, 中西1999)。東大阪市域東南部ではこれまで大規模な調査事例がないことから、今のところ歴史時代の遺構遺物は周辺の遺跡からまとまって見つかった例は限られている。

## 1.3 層序

船山遺跡3次調査地点は西側の現標高が25.4m、東側が28mと約2.5mの段差がある。これは1960年代に西側で宅地が建設された時に、1m強の客土が施されたことが大きい。もっとも、宅地開発以前には東側の現代の水田作土層上面で27mの標高があり、西側とはもともと1.5mほどの段差があった。本調査地点は扇状地の緩斜面上に位置していることから、とくに歴史時代以降、傾斜地を削平あるいは客土し、人間の居住に適するよう土地が平坦化されてきたようだ。

断面図を作成した地点は図1.4のとおりで、それらを図1.7～1.12に示す。

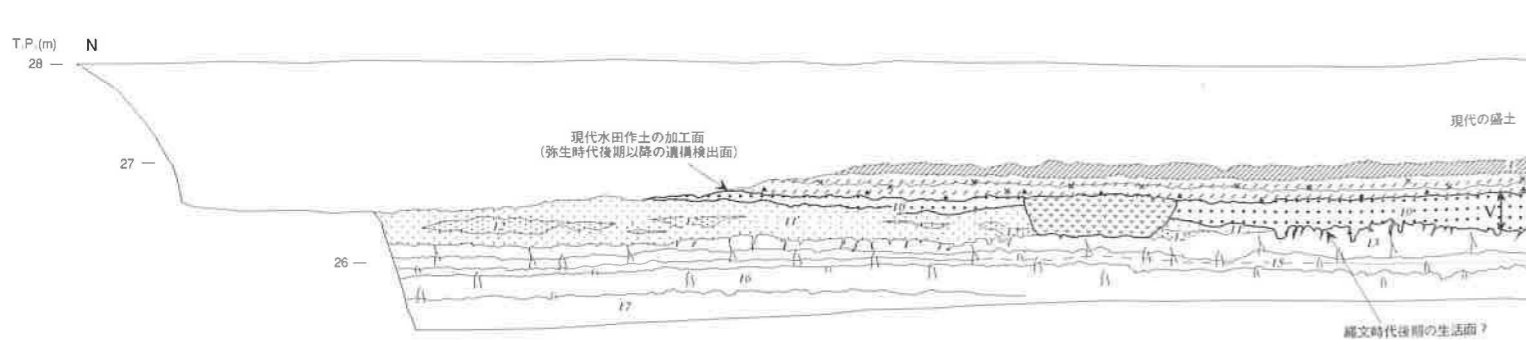


図 1.7 C2,3 区東壁断面図.

1. 5Y3/1 オリーブ黒色, やや礫混じり泥質砂, 人為堆積層, 水田耕土
2. 10Y7/1 オリーブ灰色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
3. 5GY6/1 オリーブ灰色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
4. 7.5YR5/6 明褐色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
5. 7.5Y4/1 灰色, 礫混じり砂質シルト, マトリクスサポート
6. 7.5Y4/1 灰色, 礫混じり砂質泥, マトリクスサポート
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色, 極粗粒砂～中粒砂, 水平層理
8. 5BG6/1 青灰色, 中粒砂～細粒砂, 水平層理
9. 10BG6/1 青灰色, 粘土質シルト, 無層理
10. 5Y3/1 オリーブ黒色, 細礫～極粗粒砂混じり粘土質シルト, マトリクスサポート, 縄文時代後期の遺物産出?
11. 5Y4/1 灰色, 細礫混じり中粒砂～細粒砂, 水平層理
12. 7.5YR4/3 褐色, 細礫～中粒砂, 水平層理
13. 10YR6/4 にぶい黄褐色, 極細粒砂～シルト, 水平層理
14. 7.5Y4/3 褐色, 細礫～粗粒砂, トラフ型斜交層理
15. 7.5Y6/2 灰オリーブ色, 細粒砂から極細粒砂, 水平層理
16. 2.5Y3/1 黒褐色, 極細粒砂～シルト, 無層理
17. N3/0 暗灰色, 細粒砂混じりシルト～粘土, 無層理

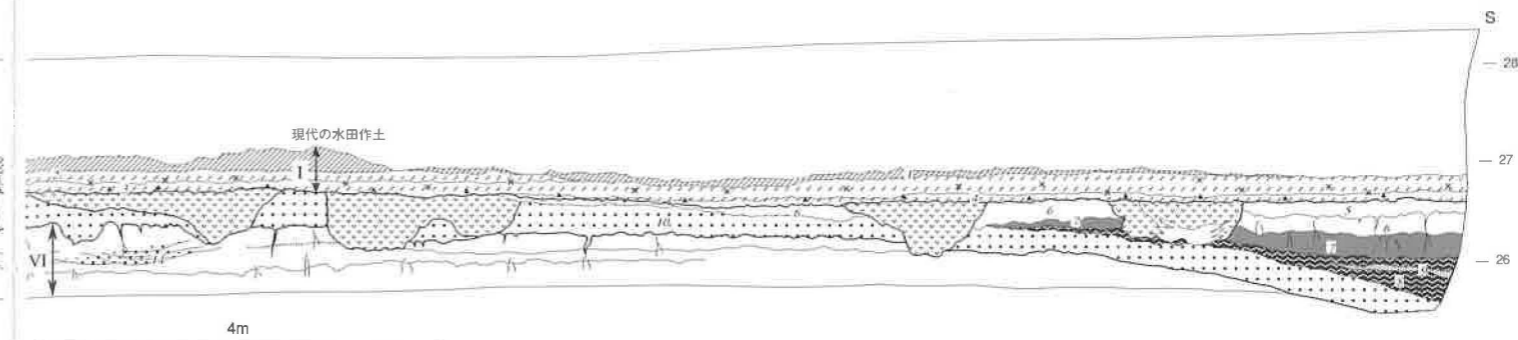


図 1.8 C1 区東壁断面図.

1. 5Y3/1 オリーブ黒色, やや礫混じり泥質砂, 人為堆積層, 水田耕土
2. 10Y7/1 オリーブ灰色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
3. 5GY6/1 オリーブ灰色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
4. 7.5Y7/3 浅黄色, 細粒砂と極細粒砂～シルトの互層, 平行層理
5. 10Y4/1 灰色, シルトと極細粒砂～細粒砂の互層, 平行層理
6. 5Y5/2 灰オリーブ色, 泥混じり砂質礫, クラストサポート
7. 7.5GY2/1 緑黒色, 砂礫混じり泥, マトリクスサポート
8. 2.5GY2/1 黒色, 粘土質シルト, 無層理, 重泥炭層
9. 7.5GY7/1 明緑灰色, 砂礫質泥, 上方細粒化, マトリクスサポート

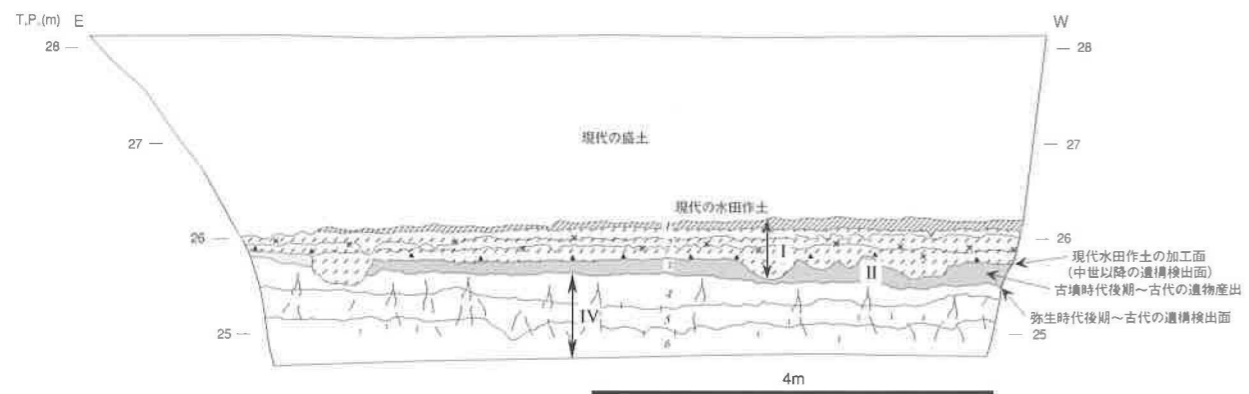


図 1.9 E2 区南壁断面図.

1. 5Y3/1 オリーブ黒色, やや礫混じり泥質砂, 人為堆積層, 水田耕土
2. 10Y7/1 オリーブ灰色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
3. 2.5Y3/1 黒褐色, 礫混じり泥質砂, 酸化マンガン含む?, 古墳時代後期～平安時代の遺物産出
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色, 礫混じり泥質砂, マトリクスサポート, 生物擾乱
5. 5Y6/3 オリーブ黄色, 砂質泥, マトリクスサポート, 生物擾乱
6. 10GY2/1 緑黒色, 極細粒砂～シルト, 無層理, 生物擾乱

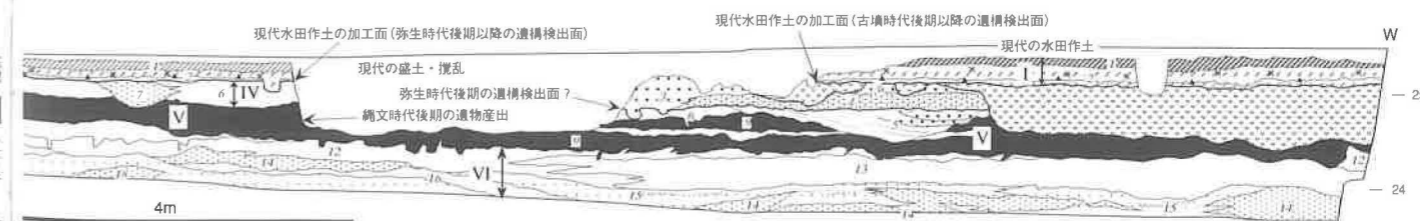
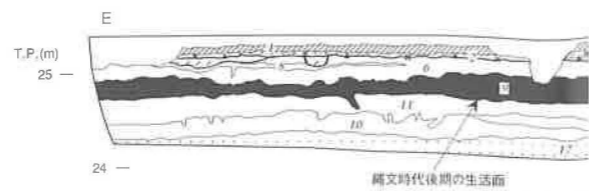


図 1.10 E3 区南壁断面図.

1. 5Y3/1 オリーブ黒色, やや礫混じり泥質砂, 人為堆積層, 水田耕土
2. 10Y7/1 オリーブ灰色, やや礫混じり泥質砂, 酸化鉄・酸化マンガン沈着, 人為堆積層, 水田床土, 弥生時代～現代の遺物産出
3. 10YR5/1 褐灰色, 礫混じり泥質砂, 無層理, 泥炭堆積物
4. 10YR5/2 灰黄褐色, 細礫～極粗粒砂と粗粒砂～細粒砂, 水平層理
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色, 粗粒砂～極細粒砂, トラフ型斜交層理～水平層理
6. 7.5Y4/1 灰色, やや礫混じり泥質砂, マトリクスサポート
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色, 細礫～粗粒砂, 無層理
8. 10YR3/2 黒褐色, 泥質砂, 水平層理
9. 5Y2/1 黒色, やや礫混じり砂質泥, 無層理, 縄文時代後期の遺物産出
10. 2.5Y6/4 にぶい黄色, 粗粒砂～中粒砂混じり粘土質シルト, 無層理, 生物擾乱
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色, 礫混じり泥質砂, 無層理
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色, 細礫から極粗粒砂混じり細粒砂～シルト, 生物擾乱
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色, 極粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂, 生物擾乱
14. 2.5GY5/1 オリーブ灰色, 細礫混じり中粒砂～細粒砂, 水平層理
15. 7.5GY6/1 緑灰色, 極細粒砂, 極粗粒砂～中粒砂の薄層が挟まる, 水平層理
16. 7.5Y6/1 灰色, 細粒砂～シルト, 水平層理, 生物擾乱
17. 5Y5/3 灰オリーブ色, 極粗粒砂混じり細粒砂～極細粒砂, 水平層理生物擾乱
18. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色, 細礫～極粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂, 水平層理

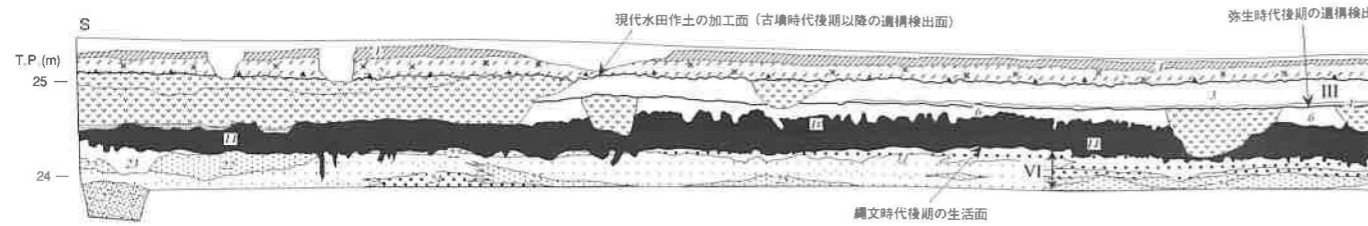


図 1.11 E3～G1～M区西壁断面図。



図 1.12 M区北壁断面。

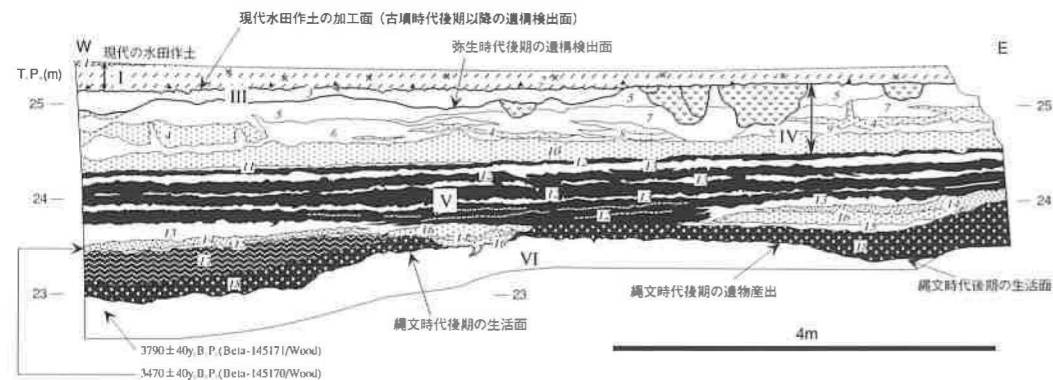
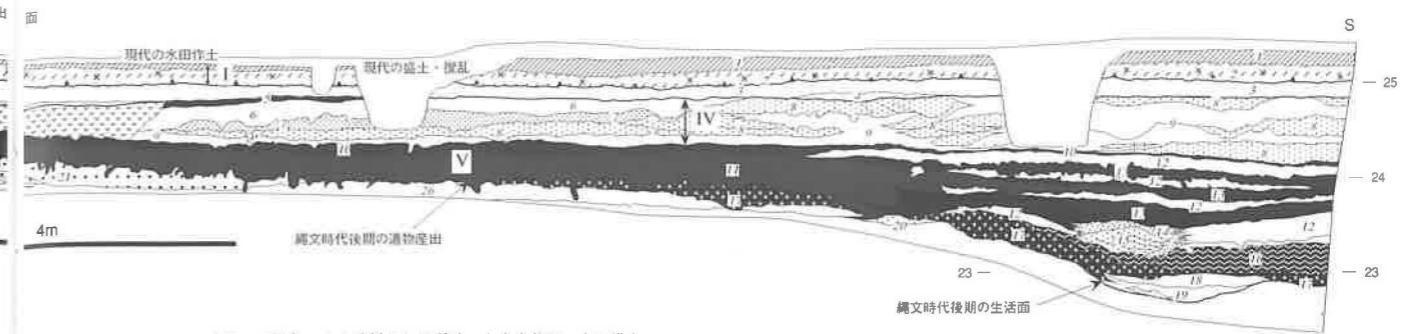


図 1.13 M区北壁断面図。

1. 5Y3/1 オリーブ黒色、やや礫混じり泥質砂、人為堆積層、水田耕土
2. 10Y7/1 オリーブ灰色、やや礫混じり泥質砂、酸化鉄・酸化マンガン沈着、人為堆積層、水田床土、弥生時代～現代の遺物産出
3. 10YR5/1 褐灰色、礫混じり泥質砂、無層理、氾濫堆積物、弥生時代後期の遺物産出
4. 5Y6/2 灰オリーブ色、細礫～極粗粒砂混じり細粒砂、無層理
5. 2.5Y4/1 黄灰色、粗粒砂～細粒砂、無層理
6. 7.5Y6/2 灰オリーブ色、細粒砂～シルト、無層理
7. 2.5Y4/1 黄灰色、中粒砂～極細粒砂、無層理
8. 5Y6/2 灰オリーブ色、極粗粒砂～中粒砂、トラフ型斜交層理
9. 7.5Y6/2 灰オリーブ色、細粒砂～シルト、無層理
10. 2.5 Y 4/2 暗灰黄色、細礫混じり中粒砂～細粒砂、水平層理？
11. 5G6/1 緑灰色、極細粒砂～シルト、水平層理
12. 2.5Y3/1 黒褐色、粘土質シルト、無層理、重泥炭層
13. 7.5GY6/1 緑灰色、極細粒砂～シルト、水平層理
14. 5GY6/1 オリーブ灰色、細粒砂～極細粒砂、水平層理
15. 7.5GY6/1 緑灰色、粘土質シルト、無層理
16. 10GY7/1 明緑灰色、細粒砂と極細粒砂～シルトの互層、水平層理
17. 10YR4/6 褐色、シルト質粘土、無層理、泥炭層
18. 2.5Y2/1 黒色、砂礫混じり泥、マトリクスサポート、縄文時代後期の遺物産出



1. 5Y3/1 オリーブ黒色、やや礫混じり泥質砂、人為堆積層、水田耕土
2. 10Y7/1 オリーブ灰色、やや礫混じり泥質砂、酸化鉄・酸化マンガン沈着、人為堆積層、水田床土、弥生時代～現代の遺物産出
3. 10YR5/1 褐灰色、礫混じり泥質砂、無層理、氾濫堆積物、弥生時代後期の遺物産出
4. 2.5Y4/1 黄灰色、極粗粒砂から細粒砂
5. 10YR3/1 黒褐色、やや礫混じり砂質泥、マトリクスサポート
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色、礫混じり砂、無層理
7. 2.5Y4/1 黄灰色、極粗粒砂～細粒砂、無層理
8. 5Y4/1 灰色、やや礫混じり泥質砂、マトリクスサポート
9. 7.5Y6/2 灰オリーブ色、細粒砂、水平層理
10. 10YR3/1 黒褐色、やや礫混じり砂質泥
11. 5Y2/1 黒色、やや礫混じり砂質泥、生物擾乱
12. 7.5GY6/1 緑灰色、極細粒砂～シルト、水平層理
13. 2.5Y3/1 黒褐色、粘土質シルト、無層理、重泥炭層
14. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色、細粒砂～シルト、植物遺体含む
15. 5Y5/2 灰オリーブ色、細礫～中粒砂、トラフ型斜交層理
16. 10YR4/6 褐色、シルト質粘土、無層理、泥炭層
17. 2.5Y2/1 黒色、砂礫混じり泥、マトリクスサポート、縄文時代後期の遺物産出
18. 7.5 Y 4/1 灰色、細礫混じり極細粒砂～粘土、マトリクスサポート
19. 5GY7/1 明オリーブ灰色、シルト～粘土、無層理
20. 5Y5/2 灰オリーブ色、細礫～中粒砂、無層理
21. 10YR6/2 オリーブ灰色、細礫混じり極細粒砂～粘土、マトリクスサポート
22. 2.5Y5/2 灰オリーブ色、極粗粒砂～細粒砂、水平層理
23. 2.5Y4/2 黄灰色、砂混じり泥、マトリクスサポート？
24. 10YR4/2 灰黄褐色、細礫～中粒砂、無層理
25. 2.5Y4/1 黄灰色、粗粒砂から細粒砂、無層理
26. 10YR6/2 灰黄褐色、極細粒砂、無層理
27. 2.5Y5/2 灰オリーブ色、細礫～粗粒砂と中粒砂～細粒砂の互層、水平層理

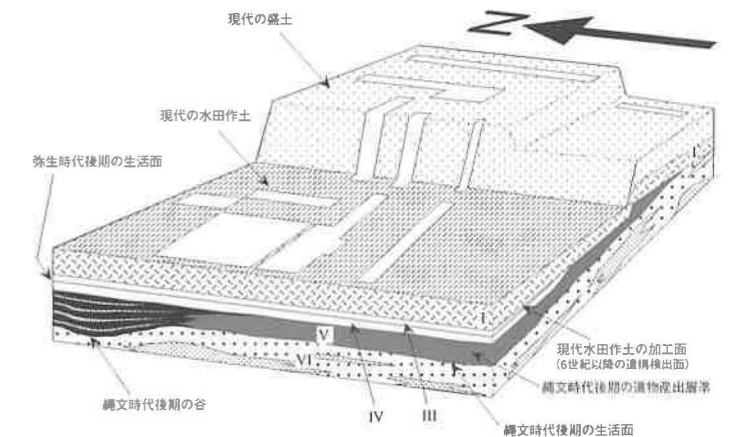


図 1.6 船山遺跡第3次調査地点における地層の重なりと分布。

船山遺跡3次調査地点の地層は東側にみられた現代の盛土を除いて大別6層に区分される。

I層は下位のオリーブ灰色の礫混じり泥質砂にオリーブ黒色の礫混じり泥質砂が載り、典型的な水田土壌をなしている。下位の礫混じり泥質砂には、イネの根茎に沿って酸化鉄がみられ、下層境界には酸化マンガンが集積している。ガラスやプラスチックの破片に混じって摩耗の著しい歴史時代の土器細片が多産したが、D地区では完形に近い状態の瓦器碗が産出している。調査地前域に分布し、層厚は東側で30～40cm、西側で30cm弱。

II層は黒褐色の礫混じり泥質砂からなり、土壌形成がみられる。上位の水田土壌に影響を受け、本層上部には酸化マンガンの斑文がみられる。層厚は約20cm。古墳時代後期(6世紀ごろ)と奈良時代末～平安時代初頭の土器片が産出した。J1, J2, G2, E2区にかけて分布するがこれらの地区の東よりのところでは上部が削平を受けている。

III層はマトリクスサポートをなす褐灰色の礫混じり泥質砂からなり、土石流性の堆積層と考えられる。弥生時代後期後半の完形に近い土器が多数産出した。層厚は約25cm以下で、E3, G1, M1区の西半部に分布する。

IV層はトラフ型斜交層理あるいは水平層理(葉理)をなす灰色や灰オリー

ブ色の礫混じり粗粒砂～細粒砂や無層理で灰色や黄灰色の細粒砂～シルトからなる。考古遺物の産出はなく、堆積年代は不詳。層厚は約80cm以下でJ2, G2, E2区以西に分布する。調査地の北側では比較的粗い粒径の砂が分布し、南へいくに従って細粒化している。流路から自然堤防にかけての堆積環境が推測され流路の中心は調査地の北側にあると考えられる。

V層はマトリクスサポートをなすオリーブ黒色や黒色、黒褐色の礫混じり砂質泥、あるいは砂質泥からなり、土石流性の堆積層と考えられる。土壌形成が著しく、本層堆積後、長期にわたって安定した地表をなしていたことがうかがえる。M区北半部やC2区の南側ではオリーブ灰色の砂層と黒色～黒褐色の垂泥炭層が互層をなし谷状の窪地を充填している。E3, G1, M区では縄文時代後期の土器が産出した。なお、M区北西隅の谷状窪地内で採取した材化石の放射性炭素年代は3470±40y.B.P.を示し、供伴土器とは調和的である。

VI層はトラフ型斜交層理あるいは水平層理をなす灰色や灰オリーブ色の礫混じり粗粒砂～細粒砂や無層理で灰色や青灰色の細粒砂～シルト、マトリクスサポートをなす明灰色の礫混じり砂質泥からなる。M区北西隅で本層から採取した材化石の放射性炭素年代は3750±40y.B.P.を示した。

以上の地層の観察にもとづき本調査地点の地層の重なりを模式的に表したものが図1.6である。本調査地点では歴史時代とくに現代の水田作土を造成したときに過去の地層が著しく削られていて、調査地東半部や西半部の東側では、現代の水田作土の加工面（I層下面）が弥生時代後期以降の遺構検出面になっている。また、調査地西半部の西側では、現代の水田作土の加工面が6世紀以降の遺構検出面になり、その下位ではかろうじて弥生時代後期の生活面が残されていた。いっぽう縄文時代の生活面は人為的に削平されることなく、調査地全域に広がっていた。

#### 1.4 遺構

##### ・古墳時代後期以降の遺構

I層下面（現代水田作土の加工面）で検出した（図1.14,15,16,17,18,19）。調査地全域に広がる。古墳時代後期（6世紀中頃）や平安時代初頭（9世紀前半）のピット群や土坑、井戸、溝が、また平安時代以降の畝立てにともなう南北方向の溝が見つかった。

ピットは長軸40cm、短軸30cm、深さ20～30cm程度で、楕円～隅丸方形のものが多く、調査地西半で密に分布する。ピット内からの出土遺物は細片で時期幅が認められる。ピット内には平坦な石を敷いて礎石として利用されたものや柱跡が確認できるものがいくつかみられる。ピットの正確な年代を特定するのは難しいが、礎石が用いられているものも含まれることから、後述するEPIやWL1と同時期の平安時代初頭に併行するものと思われる。ピット群のうちいくつかのピットは掘立柱建物の柱穴に使われたと考えられるが、建物跡を復原することはできなかった。

EP7はG1区の中央付近南よりのところで検出した（図1.16）。不定形の土坑

で長軸3m以上、深さ1m以上。6世紀中頃の須恵器や土師器が多数出土した。遺物は比較的完形に近いものが多数みられた。

EP1はG1区の北東隅で検出した（図1.16,20）。長軸2.0m、短軸1.3m、深さ50cm以上の楕円形土坑。土坑の中心には幅約50cmの板で四方を囲った枠があり、土坑内の枠の南側には多数の河原石が積まれていた（図1.22）。枠内からは平安時代初頭の土師器の甕や瓶が出土した（図1.21）。この土坑は湧水層まで掘削されていないため井戸の可能性はなく、おそらくは建物内部の地下貯蔵設備ではないかと思われる。

WL1はG1区の中央付近南よりのところで検出した（図1.16）。一辺約2.8m、深さ1.8m以上の正方形の堀形の中心に木枠を設けた井戸。EP7を切り、堀形は湧水層に達している（図1.23）。木枠は直径20cm、長さ1.8m以上の柱を四隅に配し、幅20cm～40cm、長さ90cmの板を柱間に渡して積み上げて作られている。柱には柱間に渡す板をはめ込むための幅7～8cmの溝が切られている。井戸枠内の最下部には幅30cm、長さ80cmの板が四方に配し、枠が二重になっている。井戸枠内の埋土は暗緑灰色の粘土質シルトならなり遺物の保存状態は良く、平安時代初頭（9世紀前半）の墨書を施した土師器杯、土師器片口鉢、須恵器大甕、箕、曲物底板などが出土した。須恵器大甕は箕の上に載った状態で出土していることからこれらは釣瓶として用いられていたことがわかる（図1.23,26,27）。この須恵器大甕は6世紀中頃のもので、井戸の堀形を掘削した時にEP7と一緒に掘削したことで偶然出土した大甕をそのまま釣瓶に転用したと考えられる。また、堀形の埋土にもEP7から出土したと考えられる6世紀中頃の土器が多数含まれていた。井戸の廃絶年代はわからないが、EP7最上部は井戸枠内から堀形にかけて人為的堆積層に覆われていることや、上部の木枠の一部が変形を受けていることから意図的に井戸を破壊して廃棄したことがうかがえる。



図1.14 M,G1,L,K区の古墳時代後期以降の遺構。多くのピットは平安時代初頭に併行すると考えられる。M,G1区にみられる南北方向の溝は平安時代以降の畑の畝立て溝。北東より撮影。

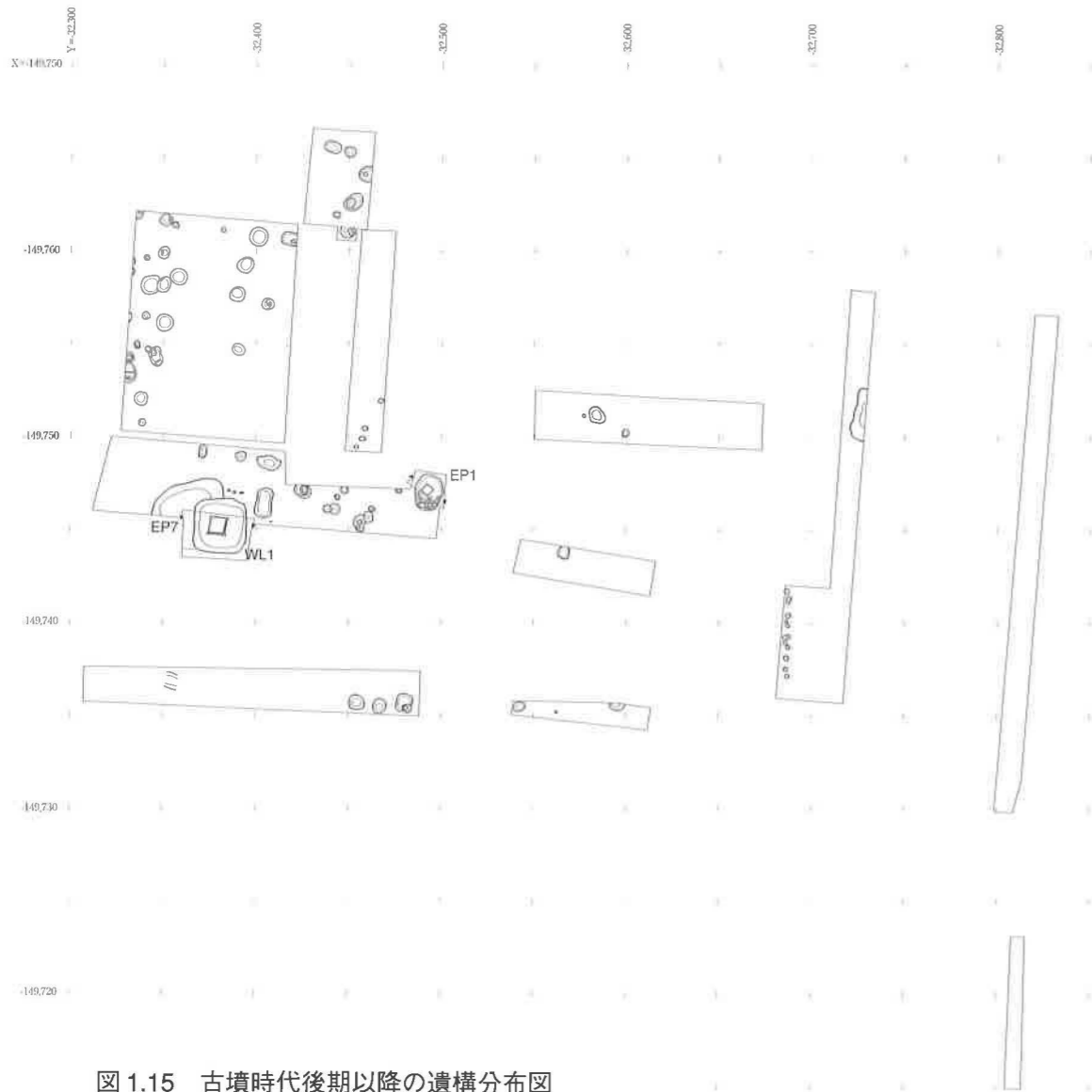


図 1.15 古墳時代後期以降の遺構分布図



図1.16 G1,M,K区の弥生時代後期以降の遺構。右下がEP1, 左上の方形の遺構がWL1。WL1の隣接する不定形土坑がEP7。南東より撮影。



図1.17 E2区の古墳時代後期以降の遺構。東より撮影。

以上、古墳時代後期以降の遺構にはピットが密に分布していることや、とくに8世紀前半については井戸や貯蔵設備がみられることから、調査地には日常生活に密接に関わった何軒かの建物が存在していたといえる。

・弥生時代後期の遺構

調査地西半西側のIII層下面、同東側のI層下面で検出した(図1.29,30)。幅70~80cm、深さ30cm以上のおおむね東西方向におびる溝を3条検出した。遺構内から出土した遺物は細片が多く、時期の特定が難しいが、これらを多うIII層からはまとまった状態で土器が出土した。これらの土器は弥生時代後期後半に併行するもので、溝の年代もこの時期に比定される。

・縄文時代後期の遺構

調査の設計人力掘削土量の関係で、縄文時代後期に生活面まで調査を行ったのはM区とG1,E3区の一部に留めた。人為的な遺構はみられなかったが、M区の北側で谷状の窪地を検出した(図1.31.32)。窪地の埋土やV層からはわずかながら縄文時代後期中葉の元住吉山II式~宮滝式に併行する土器が出土した。

1.4 遺物



図 1.21 EP1木枠内で出土した土師器甕、瓶。



図1.22 EP1. 土坑堀形の南側には多数の川原石が積まれていた。北東より撮影。

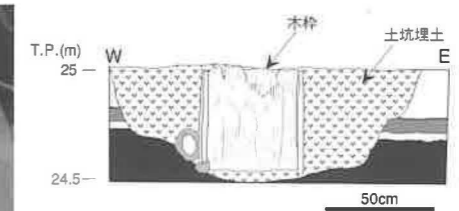


図 1.20 EP1断面図

図 1.18 D1,2区の古墳時代後期以降の遺構。南より撮影。



図 1.19 J1,2区の古墳時代後期以降の遺構。西より撮影。

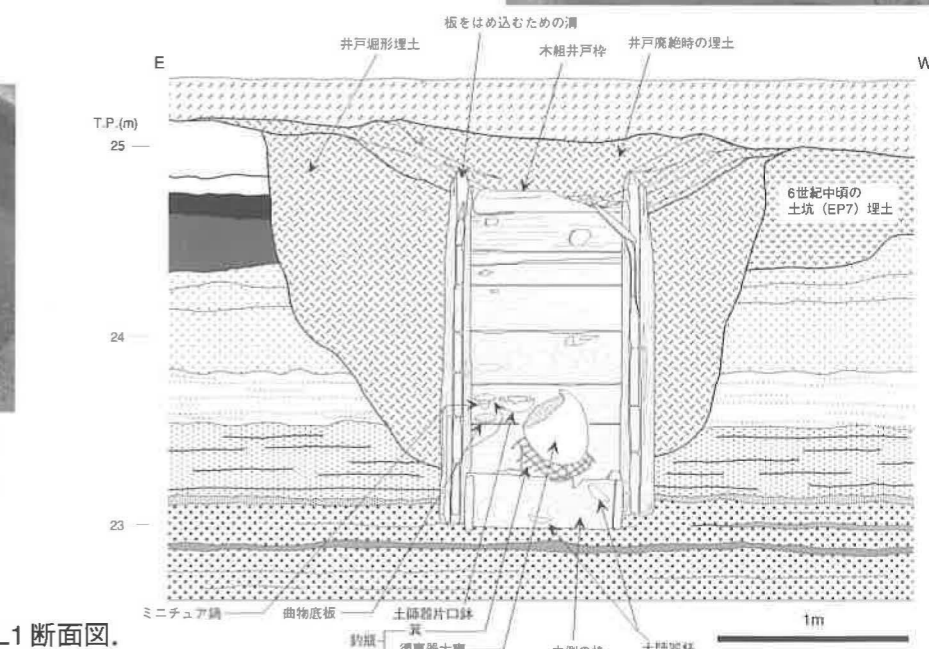


図 1.23 WL1断面図。





図 1.24 WL1 井戸枠内部の調査の様子。



図 1.25 WL1 完掘状況。



図 1.26 WL1 井戸枠内出土須恵器大甕および土師器片口鉢。



図 1.27 WL1 井戸枠内出土箕。箕の上に須恵器大甕が載っており釣瓶として用いられた。



図 1.28 WL1 断面。北より撮影。

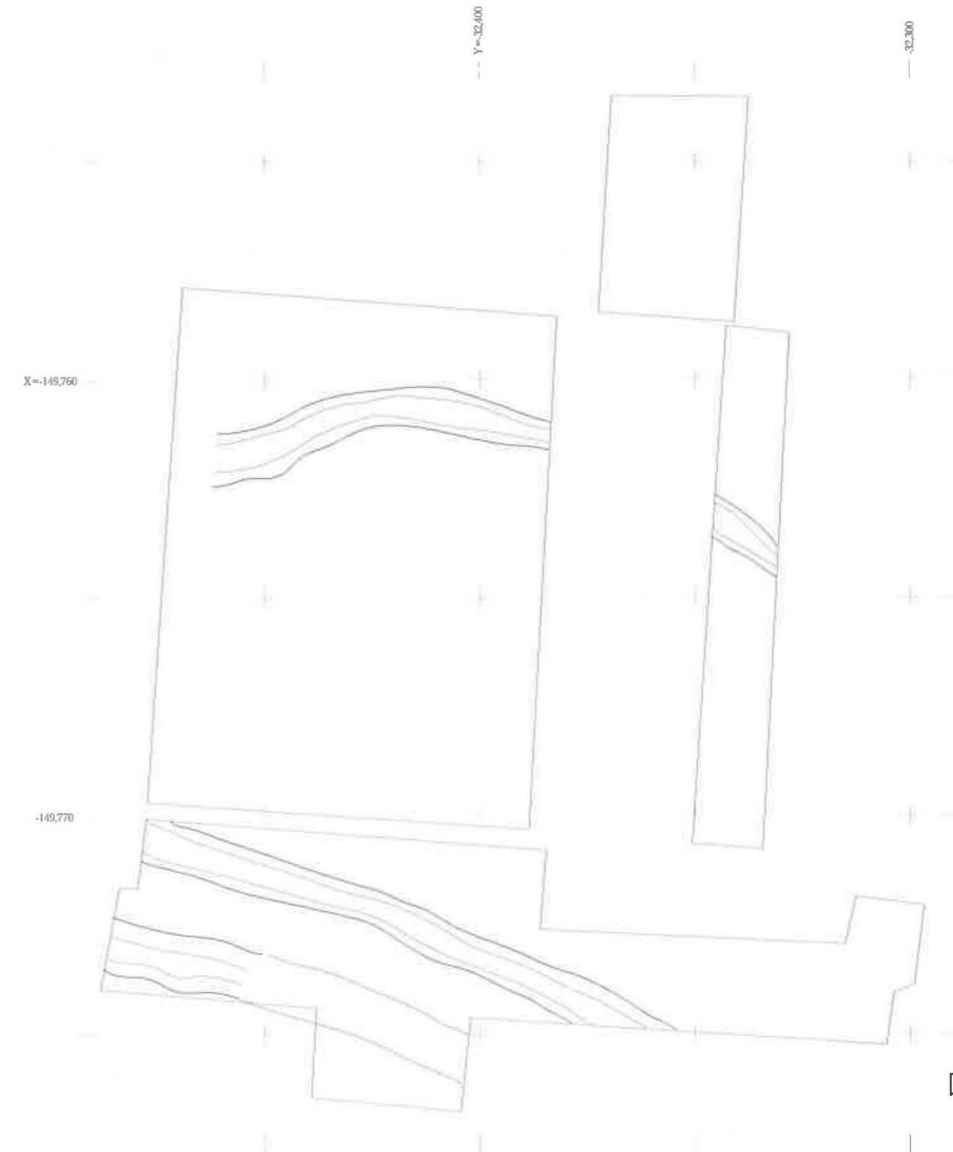


図 1.29 弥生時代後期以降の遺構分布図。



図 1.30 G1,M,K,L 区の縄文時代後期以降の遺構。M,K,L 区の一部で段違いで深くなっているところが縄文時代後期の地形面。G1,M,K 区で東西にのびている溝が弥生時代後期のもの。ピットは古墳時代後期以降のもの。

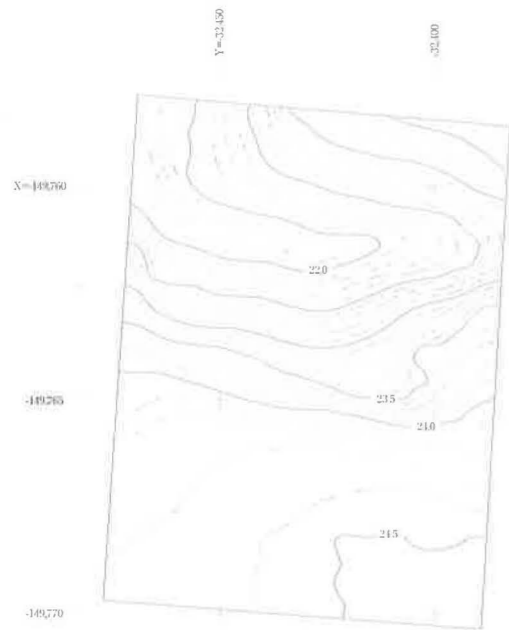


図1.31 M区の縄文時代後期地形面等高線図.



図 1.32 M区北半の縄文時代後期の谷状窪地. 窪地からは後期宮滝式に併行する土器が出土した.

・I層出土遺物

現代水田作土層であるI層にはプラスチックやガラス片ともに歴史時代の土器細片が多数みられたが、D1区では完形に近い状態の瓦器碗や土師器皿が出土した(図1.33,34,35)。

233は口縁が直線的に立ち上り、比較的高い高台をもつ。見込みのヘラミガキは不定方向でその上半のヘラミガキは不明瞭。外面のヘラミガキは粗く、高台付近にまで達している。胴部には円形の打ち欠き痕がみられる。表面の摩耗がめだつ。234は外反する口縁で、高台の端部は面をもつ。見込みのヘラミガキは格子状で、後に内面上半に密に水平方向のヘラミガキが施されている。外面のヘラミガキは粗い。表面の摩耗がめだつ。238はやや屈曲しながら外反する口縁をもち、高台は断面三角形の形状をなす。内面のヘラミガキは密で、外面は粗い。見込みのミガキは不明瞭。口縁の一部には意図的に打ち欠いたような隔離痕がみられる。表面の摩耗がめだつ。239は口縁が直線的に立ち上り、端部には沈線がみられる。見込みのヘラミガキは連結輪状で、後に内面上半に極めて密な水平方向のヘラミガキが施される。外面は粗い分割ヘラミガキが上半部に施されている。口縁には意図的に打ち欠いたような隔離痕と底部付近に小さな穿孔がみられる。表面の摩耗がめだつ。以上のうち、233、234、238は和泉型瓦器碗I-3～II-1、239は大和型瓦器碗I-D～II-A(森島1995)に併行し、12世紀前半のものと考えられる。

235,236,240は土師器皿で、これらもD1区で出土した。いずれ

も口縁が打ち欠かれている。

以上の土器は点在していたものの限られた場所から出土していることから、原位置からあまり動いていないと考えられ、また口縁や胴部を打ち欠いたものが多く、D1区付近には平安時代末ごろの墓があったと想像される。おそらくこれらの墓は後世の開発によって削平されたのだろう。

・EP1出土土器

EP1木柵内からは土師器壺、甕が出土した(図1.36,37)。土師器壺1は細長い長頸壺で、口縁部を欠損する。頸部は面取りを意識した仕上げになっている。胴部下半には不定方向の緩いヘラケズリがみられる。土師器甕2は外反口縁をもち、胴部下半にハケが施されている。1と2は胎土に含まれる鉱物種や色調が酷似している。3はやや外反する口縁をもち、口縁部内面と外面全体にハケが施されている。これらの土師器杯は平安京I型式中段階～新段階に比定され、9世紀前半のものと考えられる。

・WL1出土遺物

WL1井戸柵内部からは土師器杯、土師器片口鉢、ミニチュア竈、曲物底板(図1.44,46)、箕などが出土した。

土師器杯503、504は底部が平らで、やや外反する口縁をもつ(図40,47)。口縁内外面は丁寧なヨコナデが、底部内面はナデが施され、口縁部には沈線を有する。底部外面の中央にはいずれも「米」印が墨書されているが、やや稚拙な運筆である。井戸の底部から出土した。土師器杯505は丸底で、口縁はやや内湾気味である。割れた状態で出土した。口縁内外面とも丁寧にヨコナデが施されている。底部外面の中央には「×」印が墨書されている(図1.40,47)。510は土師器杯の底部破片で、「中」の墨書がみられる(図1.43,47)。503、504、505はいずれも口縁の一部が欠損していることから、何らかの呪い目的で井戸に投棄されたものと考えられる。これらの土師器杯はEP1と同じく平安京I型式中段階～新段階に比定され、9世紀前半のものと考えられる。

502は土師器片口鉢で、注口部を含めて口縁部3カ所に打ち欠きがみられる。口縁は内湾しながら立ち上がり、内面や口縁部外面は丁寧にヨコナデされている(図1.38,47)。

501はミニチュア竈で、仕上は粗雑(図1.42)。

159は須恵器の大甕で、口縁部が欠損している(図1.39)。井戸柵内から出土した他の土器とは時期が異なる。先述のようにこの大甕は箕の上に載った状態で出土していることから、井戸の堀形を掘削した時にEP7と一緒に掘削したことで偶然出土した大甕をそのまま釣瓶に転用したと考えられる。

いっぽう、WL1の堀形からも本来EP7に含まれていた土器が多数出土している。022、023は平底で寸胴形の胴部をもつ土師器壺で、外面は粗いハケを



図 1.35 I層出土土師器皿.



図 1.36 EP1出土土師器.

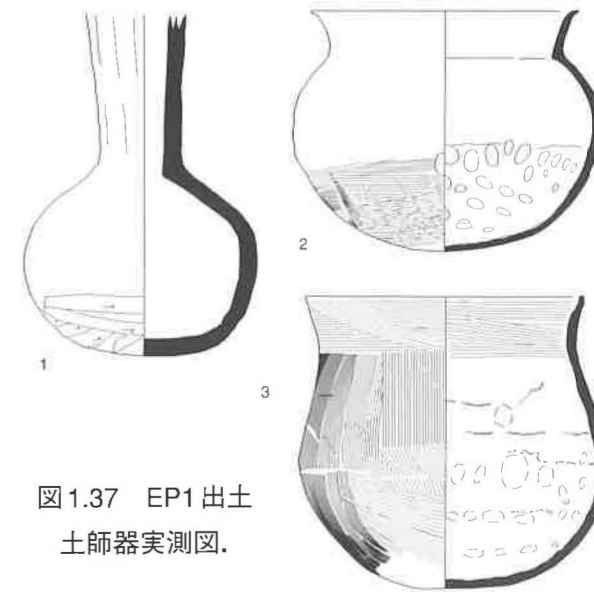


図1.37 EP1出土土師器実測図.



図 1.33 I層出土瓦器碗



図 1.34 I層出土瓦器碗. 底側を撮影.



図 1.38 WL1 井戸枠内出土土師器片口鉢.



図1.39 WL1井戸枠内出土須恵器大甕. 6世紀のものが釣瓶として転用されたもの.



図1.40 WL1井戸枠内出土土師器皿(上)と底部にみられる墨書(下).



図 1.42 WL1 井戸枠内出土ミニチュア竈.



図1.43 WL1井戸枠内出土墨書のある土師器皿底部.

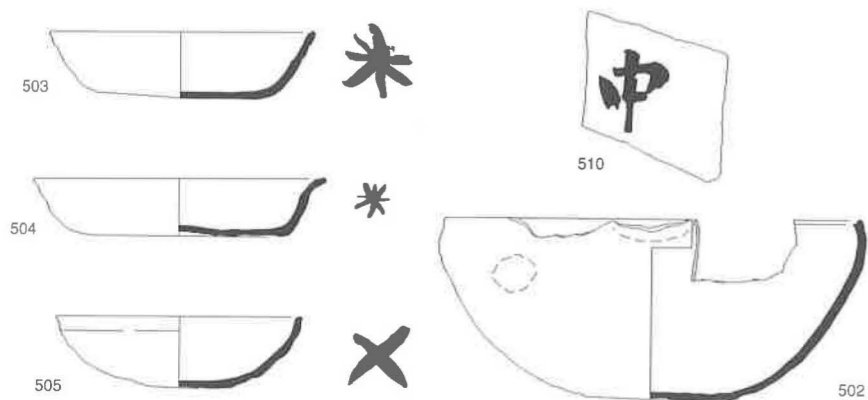


図 1.47 WL1 井戸枠内出土土器実測図, 503 ~ 505 の墨書と 510 は縮尺 50%.



図 1.44 WL1 井戸枠内出土曲物底板(1).

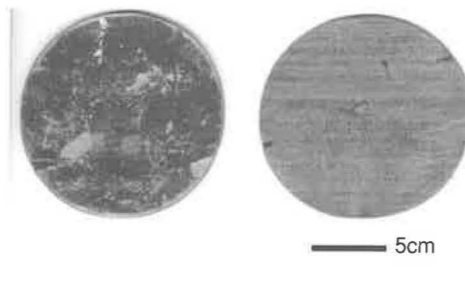


図1.45 WL1井戸枠内出土曲物底板(2).

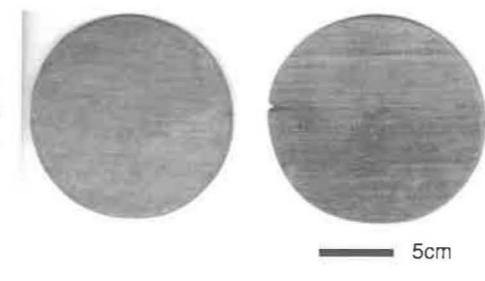


図 1.46 WL1 井戸枠内出土曲物底板(3).



図 1.48 WL1 堀形出土土師器甕.



図 1.49 WL1 堀形出土土師器, 須恵器.

縦方向に施している(図1.48)。160は須恵器杯身で口縁は短く、内側に向かって外反しながら立ち上がる。161は須恵器瓶の口縁部。24は土師器鉢で、口縁は外反しながら立ち上がる。口縁付近は丁寧にヨコナデされている。26は丸底の土師器杯(図1.49)。

・EP7 出土遺物

EP7からは多数の須恵器や土師器が出土した。完形のものではなく一部を欠損しているものや全体的に破損しているものが多い。

須恵器には大甕(158;図1.50)や甕(145;図1.52)、壺(51;図1.59,146;図1.55,508;図1.51)、杯身(141;図1.54,150,152;図1.53)、杯蓋(144;図1.54,148;図1.52,149;図1.53)、高杯(157;図1.58,507;図1.54)、提瓶(137;図1.51)、ハソウ(155,156,506;図1.58)がある。杯身や高杯の特徴から判断して陶邑II型式2~4段階(中村1990)の範疇におさまるもので、おおむね6世紀中頃に比定される。

土師器には甕(50;図1.59,54;図1.55,56,60;図1.57)、椀(34;図1.54,43;図1.57)、竈(31;図56)がある。甕のうち50は長胴形で、竈にかけて用いられたものと考えられる。いずれの甕も外面に縦方向の粗いハケメがみられ、器形の調整は粗雑である。

・III層出土遺物

とくにM,G1区のIII層から多数の弥生時代後期の土器が出土した(図1.60,61)。完形のものが多い。168は口縁端部に面を有し、胴部外面にタタキが施された甕。169の甕は胴部外面にタタキを施した後、上半部をナデとハケを施している。186は長頸壺の衰退とともに台頭する短頸壺。表面の風化が著しく、調整は不明瞭。190は裾の広がりが大きい脚部に椀形杯部をもつ高杯。全体的に丁寧なミガキが施されている。杯部内面には放射状のミガキがみられる。これらの土器は河内VI様式(森井1989)に併行する。

・V層出土遺物

M,G1区から僅かながら縄文時代後期の土器が出土した(図1.62)。M区北半の谷状窪地からはやや多くの破片が出土しているが、詳細な時期を決めるほどには至らなかった。509は深鉢で、外面には巻貝条痕と2組の2条沈線がある。縄文時代後期元住吉山II式~宮滝式に併行する。



図 1.50 EP7 出土須恵器大甕.



図 1.51 EP7 出土須恵器提瓶, 甕.

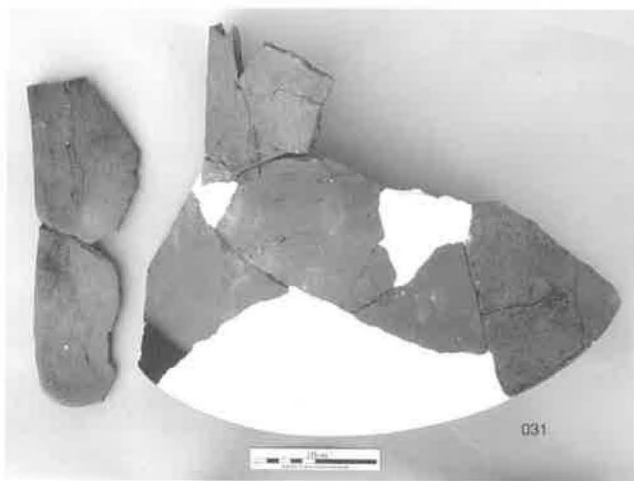


図 1.56 EP7 出土土師器甕.



図 1.52 EP7 出土須恵器甕, 杯蓋.



図 1.53 EP7 出土須恵器杯身, 杯蓋.



図 1.54 EP7 出土須恵器, 土師器.

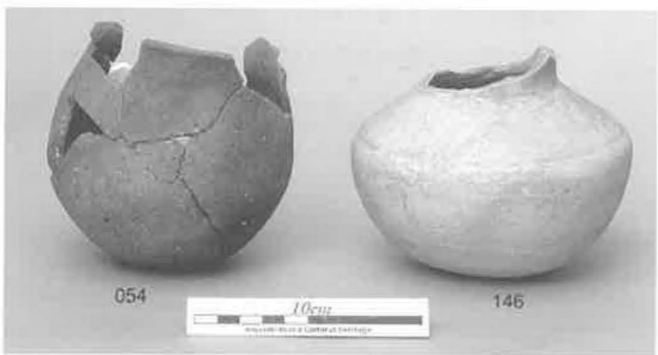


図 1.55 EP7 出土須恵器, 土師器.



図 1.57 EP7 出土土師器甕, 杯.



図 1.58 EP7 出土須恵器ハソウ, 高杯.



図 1.59 EP7 出土須恵器, 須恵器.

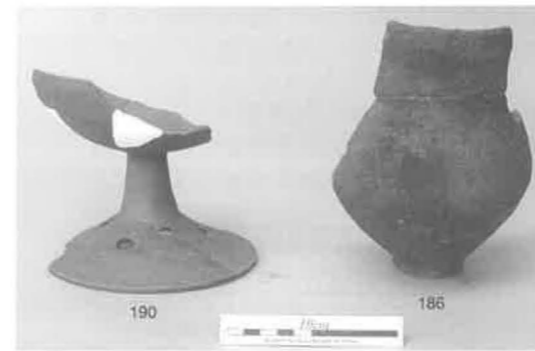


図 1.60 III層出土弥生土器高杯, 短頸壺.



図 1.61 III層出土弥生土器甕.



図 1.62 V層出土縄文土器深鉢.

### 1.5 まとめ

- (1) 船山遺跡第3次発掘調査では縄文時代後期の生活面や弥生時代後期の遺構面、古墳時代後期（6世紀中頃）、平安時代初頭（9世紀前半）の遺構面を検出し、これらの時期に併行する遺物が出土した。また、現代の水田作土層（I層）からは打ち欠き痕がある平安時代末期（12世紀前半）の瓦器椀や土師器皿が出土した。
- (2) 平安時代末期の遺構面は後世の開発によって完全に削平されているが、現代の水田作土層から打ち欠き痕がある瓦器椀や土師器皿は限られた場所からまとまって出土していることから、同時期の墓があったと想像される。
- (3) 平安時代初頭の遺構には礎石をもつピットや井戸（WL1）、貯蔵設備（EP1）がみられることから判断して、調査地には日常生活に密接に関わった何軒かの建物が存在していた。
- (4) 井戸（WL1）の井戸枠内からは、底部に「米」や「×」印などの墨書があり、口縁に打ち欠き痕がみられる土師器杯が出土しているが、これらは何らかの呪い目的で井戸に投棄されたものと考えられる。
- (5) 弥生時代後期遺構の遺構面は後世によって著しく削平されており、とくに調査地東半部ではこの時期に併行する遺構を検出することが困難であった。しかしながら、調査地周辺には縄文時代後期や弥生時代後期の遺構やいわゆる遺物包含層が後世の破壊を免れて分布している可能性があり、今後の周辺の調査では注意を要する。

## 文 献

- 芋本隆裕 1999a 「山畑遺跡第15次発掘調査概要」財団法人東大阪市文化財協会。  
芋本隆裕 1999b 「岩滝山遺跡第5次発掘調査概要」財団法人東大阪市文化財協会。  
芋本隆裕・才原金弘 1998 「客坊山遺跡群第2次発掘調査報告」財団法人東大阪市文化財協会。  
上野利明 1982 半堂遺跡発掘調査概要。「半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概要」東大阪市教育委員会、1-14。  
上野利明・中西克宏 1985 大賀世2号墳・3号墳出土遺物について。「財団法人東大阪市文化財協会紀要I」95-132。  
金村浩一 1994 船山遺跡第2次発掘調査業務報告(内部資料)。  
國乘和雄・宮路淳子 1993 「池島・福万寺遺跡発掘調査概要 XIII—92-1・2・3・4・5 調査区の概要—」財団法人大阪文化財センター。  
下村晴文 1975 「馬場川遺跡 III—市埋蔵文化財包蔵地調査概要 14」東大阪市教育委員会。  
下村晴文・福永信雄・芋本隆裕 1977 「馬場川遺跡発掘調査報告 V」東大阪市遺跡保護調査会。  
下村晴文・松田順一郎 1976 「馬場川遺跡発掘調査概要 IV—市埋蔵文化財包蔵地調査概報 16」東大阪市教育委員会。  
中河内郡役所編 1922 「中河内郡誌 全」p508。  
中西克宏 1999 「岩滝山遺跡第4次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会。  
中村 浩 1990 須恵器, 柏書房, 214pp。  
原田 修 1986 船山遺跡第1次発掘調査。「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—」東大阪市教育委員会、46-50。  
原田 修 1981 馬場川遺跡の調査。「馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告—市埋蔵文化財包蔵地調査概報 22」東大阪市教育委員会、3-13。  
原田 修 1989 段上遺跡の調査。「東大阪市文化財協会概報集 1988年度」財団法人東大阪市文化財協会編、133-138。  
藤井直正・原田 修 1971 「縄手遺跡 1」縄手遺跡調査会。  
藤井直正・萩田昭次・江谷 寛・竹下 賢・原田 修・北野 保 1976 「縄手遺跡 2」縄手遺跡調査会。  
藤井直正・萩田昭次・原田 修・竹下 賢 1970a 「市埋蔵文化財包蔵地調査概報 4—馬場川遺跡 I」東大阪市教育委員会。  
藤井直正・萩田昭次・原田 修・竹下 賢 1970b 「馬場川遺跡調査概報 II」東大阪市教育委員会。  
藤井直正・萩田昭次・原田 修・竹下 賢 1971 「馬場川遺跡 II—市埋蔵文化財包蔵地調査概報 6」東大阪市教育委員会。  
藤井直正・萩田昭次・江谷 寛・竹下 賢・原田 修・北野 保 1976 「縄手遺跡 2」縄手遺跡調査会。  
藤城 泰・曾我恭子・別所秀高・五井若葉 2000 「馬場川遺跡発掘調査報告書—分譲住宅建設にともなう馬場川遺跡第7次発掘調査, 住宅建設にともなう馬場川遺跡第8次発掘調査」財団法人東大阪市文化財協会。  
別所秀高 1999 微細形態学の試行—その方法と考古遺跡への応用例。「光陰如矢—萩田昭次先生古稀記念論集—」光陰如矢刊行会、147-158。  
別所秀高 2001 「主要地方道大阪東大阪線新設工事に伴う段上遺跡第3・4次発掘調査報告書」財団法人東大阪市文化財協会。  
森井貞雄 1989 2. 各地域の様式と編年。1. 河内地域。「弥生土器の様式と編年」寺沢 薫・森岡秀人編著, 木耳社, 41-146。  
森島康雄 1995 6. 瓦器碗(3)編年。「概説中世の土器・陶磁器」中世時研究会編, 真陽社, 324-330。

## 第2章 神並遺跡第23次発掘調査報告

### 2.1 調査に至る経過

神並遺跡は大阪府と奈良県の境をなす生駒山地の西麓、標高20～45mの扇状地斜面に営まれた遺跡で、現行行政区分では東大阪市東石切町1丁目、西石切町1丁目に位置している。

当遺跡は、昭和56年(1981)に国道308号線と現近鉄東大阪線の建設に伴う試掘調査でその存在が確認された。その後これまでに23次に及ぶ発掘調査が行われ、縄文時代早期の集石遺構<sup>①</sup>、古墳時代中期の導水施設<sup>②</sup>、古墳時代中期～奈良時代の製鉄関連遺物<sup>③</sup>、奈良～平安時代の掘立柱建物跡<sup>④</sup>、中世～近世の耕作地跡<sup>⑤</sup>などが確認されている。

今回、神並遺跡内の東大阪市西石切町1丁目1-1、5-1、6、7-3で共同住宅建設の計画が持ち上がり、東大阪市教育委員会が平成11年(1999)4月21日に試掘調査を実施したところ、土師器・瓦器の出土と溝状遺構が検出され、共同住宅建設に先立ち発掘調査が必要との判断が示され、協議が重ねられた。そこで埋蔵文化財が破壊される基礎部分400m<sup>2</sup>を対象とした神並遺跡第23次発掘調査が東大阪市文化財協会に委託の上、実施されることとなった。現場調査は平成11年7月8日から機械掘削を行い、人力掘削による遺構・遺物の検出を7月13日～8月30日まで、整理作業を9月1日～平成13年(2001)8月31日まで実施した。

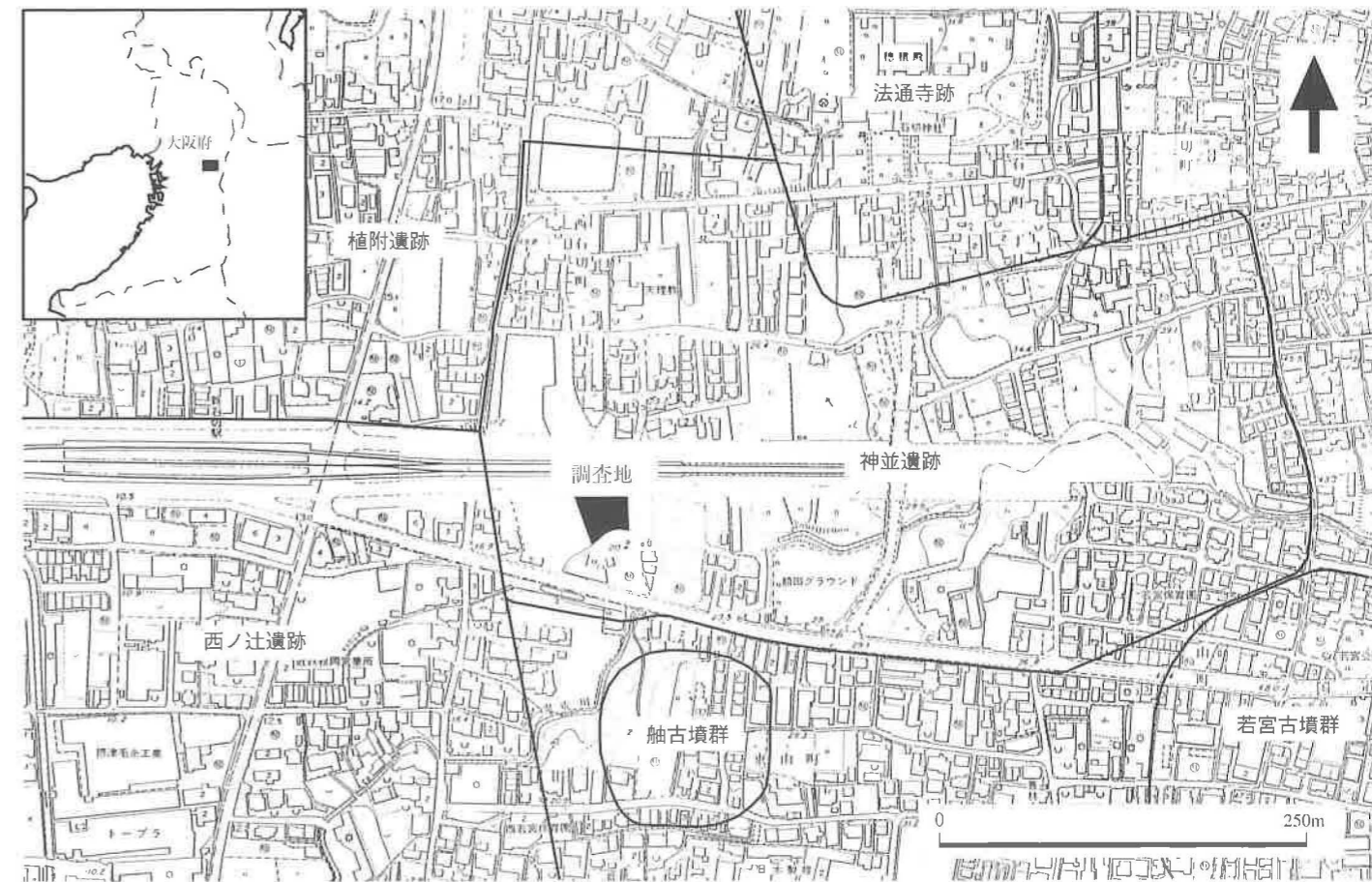


図2.1 調査地位置図 (1/5,000)

## 2.2 調査結果

### 2.2.1 層位

現地表面は標高21.1m程の平坦面をなし、第1層の盛土、第2層の耕土層、第3層を機械掘削をした。

第3層は近代の耕地整備の際の盛土層で、近代までの遺物を含み、近世～近代の棚田中位面にあたる調査地内の西半でのみ認められた。第3-1層は層厚30cm程度で、ベース層である第8-5層の明黄褐色粘土を採掘、利用した層で、多量の中礫を含んでいた。第3-2・3-3層は石垣の裏込めや耕作土が混合した層であった。

第4層は近世～近代の棚田の耕作土層である。上半は還元状態で、下半には酸化鉄が認められた。本層下面では石垣、溝、鋤跡などの耕作関連遺構が検出された。

第5層は前記の棚田を造成した際の盛土層で、調査地内の北東部を除く範囲に拡がり、中世～近世の遺物を含んでいた。標高が高い東方から順次整地されていた。調査地南東部の第5-2～5-9層は層厚45～60cmで、本層上面の標高を調査地北東部で検出された中世～近世の棚田上位面に揃えていた。一方で調査地南西部の第5-1層は層厚30cm以下と薄く、こうした盛土層の層厚差によって、東の生駒山側が高く西の平野側が低い近世～近代の棚田が形成されていた。また第5-1・5-3・5-5・5-8層はベース層の粘土ブロック主体、他の層は風化礫を多く含んでいた。

第6層は中世～近世の耕作土層で、後述するように、南北方向に籬壇を形成していた棚田に伴うものである。調査地西部の第6-1層では3枚の鉄分沈着層が認められた。調査地東端では、溜池機能時の耕作土で埋土ともなった第6-3層と溜池埋没後の耕作土層である第6-2層に細分される。本層の下面では東西方向に延びる鋤跡、暗渠、溜池、溝、土壌などの耕作関連遺構のほか、上部を削平された平安時代のピット、古墳時代の旧河道などが検出された。

第7層は調査地南東部で旧河道埋土を削平しながら拡がり、平安時代の遺物を含んでいた。下面で当該期の井戸を一基検出した。

第8層は本遺跡周辺の扇状地に更新世に堆積したベース層である。

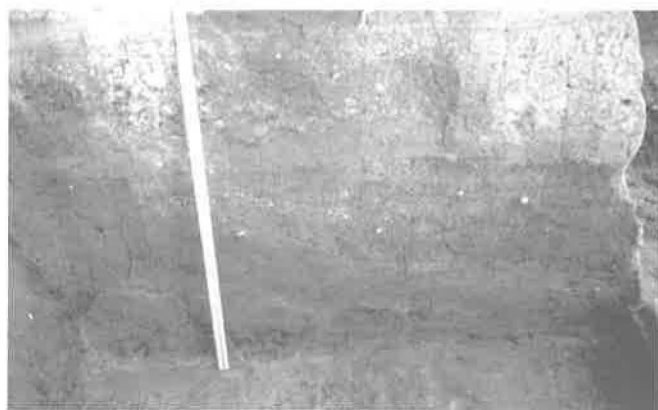


図2.2 南壁断面 東寄り

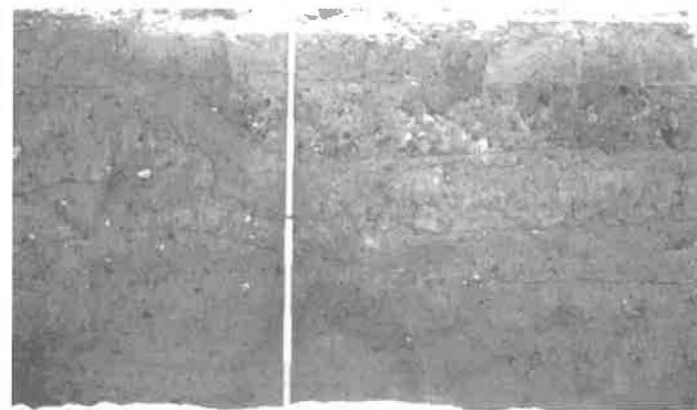
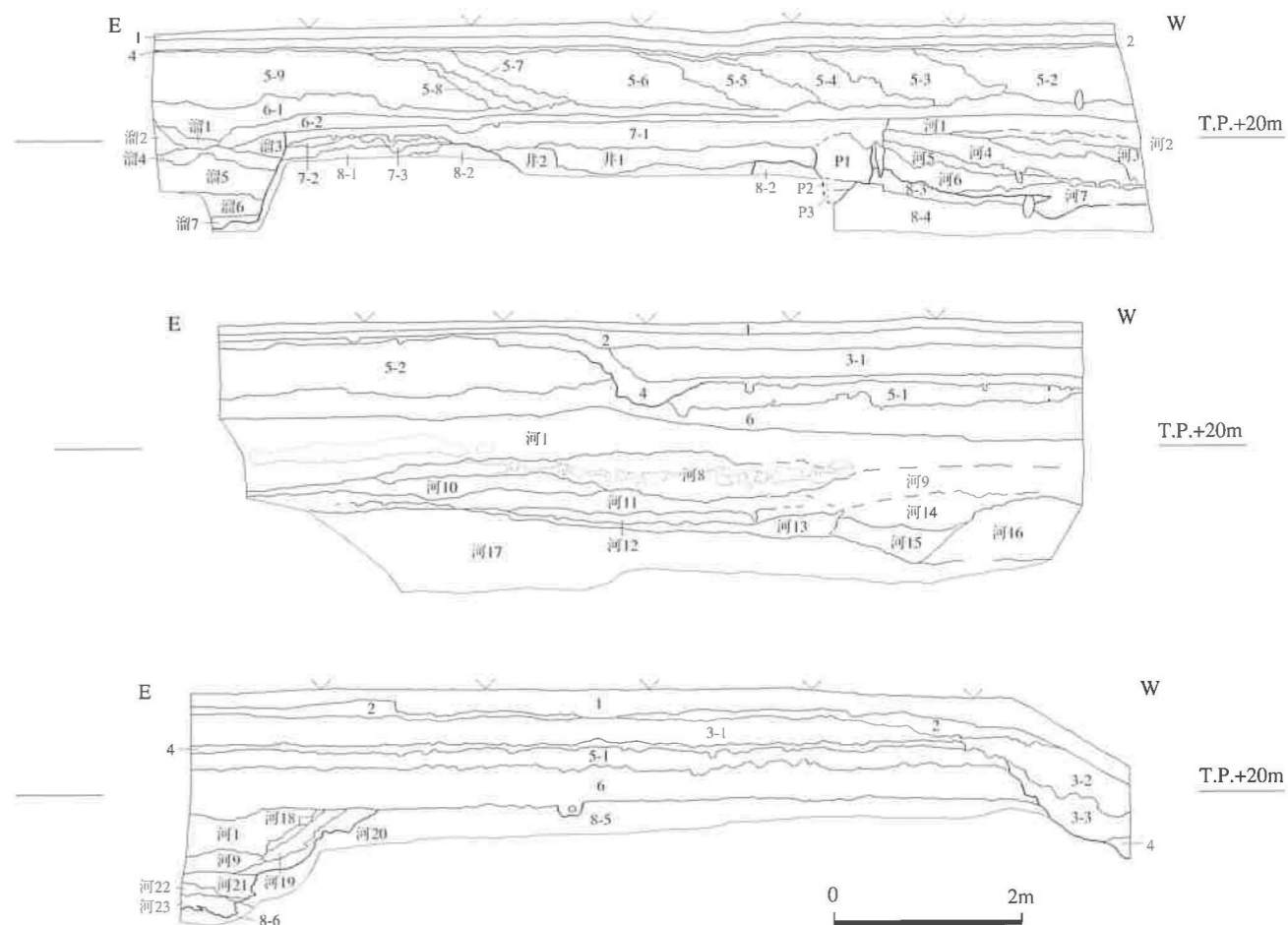


図2.3 南壁断面 中央付近



1	盛土	2	耕土
3-1	10YR6/8 明黄褐色粘土 1cm以下の礫多量含む	3-2	2.5Y3/2 黒褐色細粒砂～細礫混じり粘土 鉄分沈着
3-3	2.5Y3/2 黒褐色細粒砂～細礫混じり粘土 鉄分沈着	4	2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂～細礫混じり粘土 上半は還元、下半は酸化
5-1	10YR6/8 明黄褐色粘土	5-2	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細粒砂～細礫混じり粘土 鉄分沈着
5-3	10YR6/8 明黄褐色細礫～中礫混じり粘土	5-4	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細粒砂～細礫混じり粘土 鉄分沈着
5-5	10YR4/3 ぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 粘土ブロック・中礫を含む、鉄分沈着	5-6	2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂～中粒砂 細礫を含む、鉄分沈着
5-7	2.5Y3/2 黒褐色細粒砂～中粒砂 中礫を含む	5-8	2.5Y3/2 黒褐色細粒砂～細礫 粘土ブロック・中礫を含む
5-9	10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂 中礫を含む、鉄分・マンガン沈着	6-1	2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂～細礫混じり粘土 鉄分沈着
6-2	2.5Y3/2 黒褐色シルト～細粒砂 細礫～中礫を含む	6-3	2.5Y3/2 黒褐色シルト～中粒砂 炭化物を含む、鉄分沈着
7-1	2.5Y3/2 黒褐色シルト～中粒砂 鉄分・マンガン沈着	7-2	2.5Y3/2 黒褐色細粒砂～細礫
7-3	10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 鉄分・マンガン沈着	8-1	10YR2/2 黒褐色シルト～中粒砂
8-2	10YR2/2 黒褐色中粒砂～粗粒砂	8-3	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト～細粒砂
8-4	5Y3/2 オリーブ黒色粘土 上部はシルト～極細粒砂	8-5	10YR6/8 明黄褐色粘土中礫以下の礫を多量含む
8-6	7.5GY4/1 暗緑灰色粗粒砂～細礫	溜1	5Y4/1 灰色シルト～細粒砂 鉄分沈着
溜2	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト混じり中粒砂～粗粒砂 鉄分沈着	溜3	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～中粒砂 鉄分・マンガン沈着
溜4	10YR4/4 褐色シルト混じり細粒砂～中粒砂 鉄分沈着	溜5	5Y3/2 オリーブ黒色シルト 中礫以下の礫を含む
溜6	7.5Y4/1 灰色シルト 鉄分沈着	溜7	7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト
P1	2.5Y3/2 黒褐色中粒砂～細礫混じりシルト	P2	5Y3/2 オリーブ黒色粘土
P3	7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土	河1	10YR4/3 ぶい黄褐色粗粒砂～細礫混じり粘土 細粒砂のブロック・巨礫を含む、マンガン沈着
河2	2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂～細礫 粗粒砂～細礫のブロック含む	河3	10YR4/3 ぶい黄褐色中粒砂～細礫混じり粘土 細礫混じりシルト～細粒砂のブロック含む
河4	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗粒砂～細礫混じり粘土	河5	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色中粒砂～細礫混じり粘土
河6	10YR3/3 褐色細礫混じりシルト～粘土	河7	5Y3/2 オリーブ黒色粗粒砂～細礫混じり粘土
河8	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細粒砂～細礫混じり粘土 砂質土のブロック混じる	河9	10YR4/4 褐色中粒砂～細礫混じり粘土
河10	10YR3/4 褐色中粒砂～細礫混じり粘土	河11	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～極細粒砂 鉄分沈着
河12	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト～極細粒砂 鉄分沈着	河13	2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト～中粒砂 細礫混じる
河14	10YR3/3 褐色細粒砂～細礫混じり粘土 第8層のブロック混じる	河15	7.5GY3/1 暗緑灰色シルト～粘土 細礫混じる
河16	2.5GY3/3 暗オリーブ褐色シルト～細粒砂	河17	5Y3/1 オリーブ黒色50cm以下の礫層
河18	10YR3/3 褐色細粒砂～細礫混じり粘土	河19	2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土
河20	2.5Y3/2 黒褐色粘土 細礫混じる	河21	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗粒砂～細礫混じり粘土
河22	7.5YR5/8 明褐色粘土と7.5Y3/2 オリーブ黒色粗粒砂～中粒砂	河23	7.5GY5/1 緑灰色粘土と細粒砂～中粒砂

図2.4 南壁断面図 (1/80)

### 2.2.2 遺構

今回の調査では近世～近代、中世～近世の耕作関連遺構、平安時代の住居関連遺構、古墳時代の旧河道を検出した。

近世～近代の耕作関連遺構では棚田、石垣、溝、鋤跡を検出した。

耕作土層である第4層除去後の棚田の標高は東方の上位面が21m、中央部の中位面が20.4m、西端の下位面が19.3mで、各面の比高差は60cmと110cmであった。この棚田は前述したように、上位面においては前代の棚田上位面に標高を揃えるように、その南側に第5層を45～60cmの厚さで盛って造成されていた。中位面は北側の第8層を削平し、南側に4～30cmの盛土を以て造成されていた。また下位面は第8層を削平し、本調査地の西側に隣接する第17次調査地へ広がっていた<sup>(6)</sup>。

棚田の斜面では石垣を検出した。遺存していた石垣は概ね1列1段であったが、部分的に2段認められた。使用されていた石は長辺40～50cmの生駒石とも呼ばれる斑縞岩が多く用いられ、花崗岩が極少量混在していた。加工されたものではなく自然石であった。また中位面の棚田の東縁では、石垣に沿って南北に延びる幅80cm、深さ20cmの溝が検出された。

中世～近世の耕作関連遺構として棚田、暗渠、溝、溜池、土壇、鋤跡を検出した。

前述したように近世～近代の棚田が東西方向に雛壇を形成していたのに対し、当該期の棚田は南北方向に雛壇を形成していた。本調査地内の耕作地化がまず南北軸の棚田形態を以て始まることは、後述する旧河道の浸食によって形成された南側が低い微地形を、効率的に利用しながら第8層を削平した結果と想定される。また耕作開始時期は、後述の平安時代の井戸が廃棄されて以後である。耕

図2.5 近世～近代の遺構  
東から



図2.6 石垣2  
北から



図2.7  
石垣1  
南から

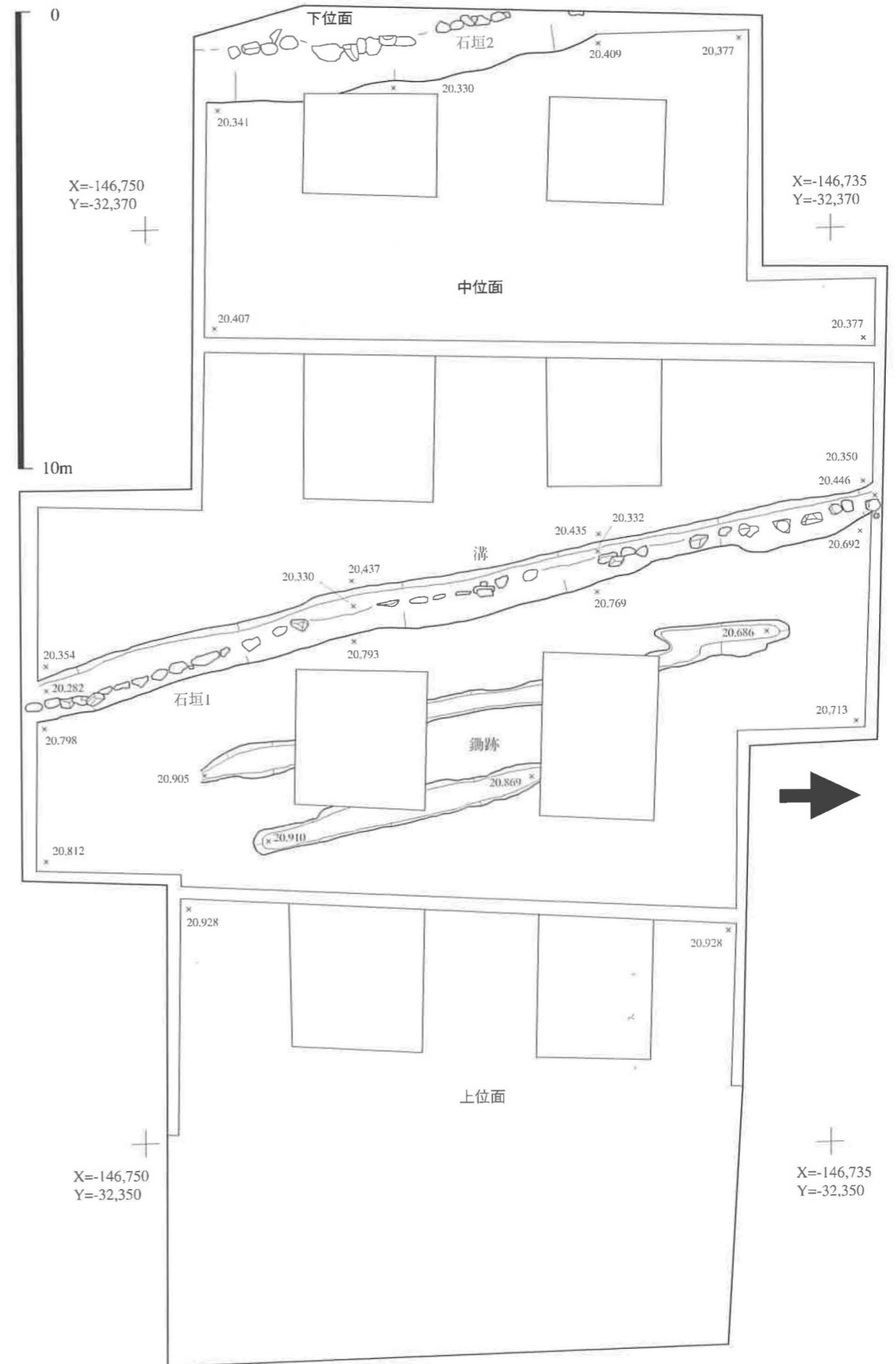


図2.8 江戸時代～近代の遺構平面図 (1/200)

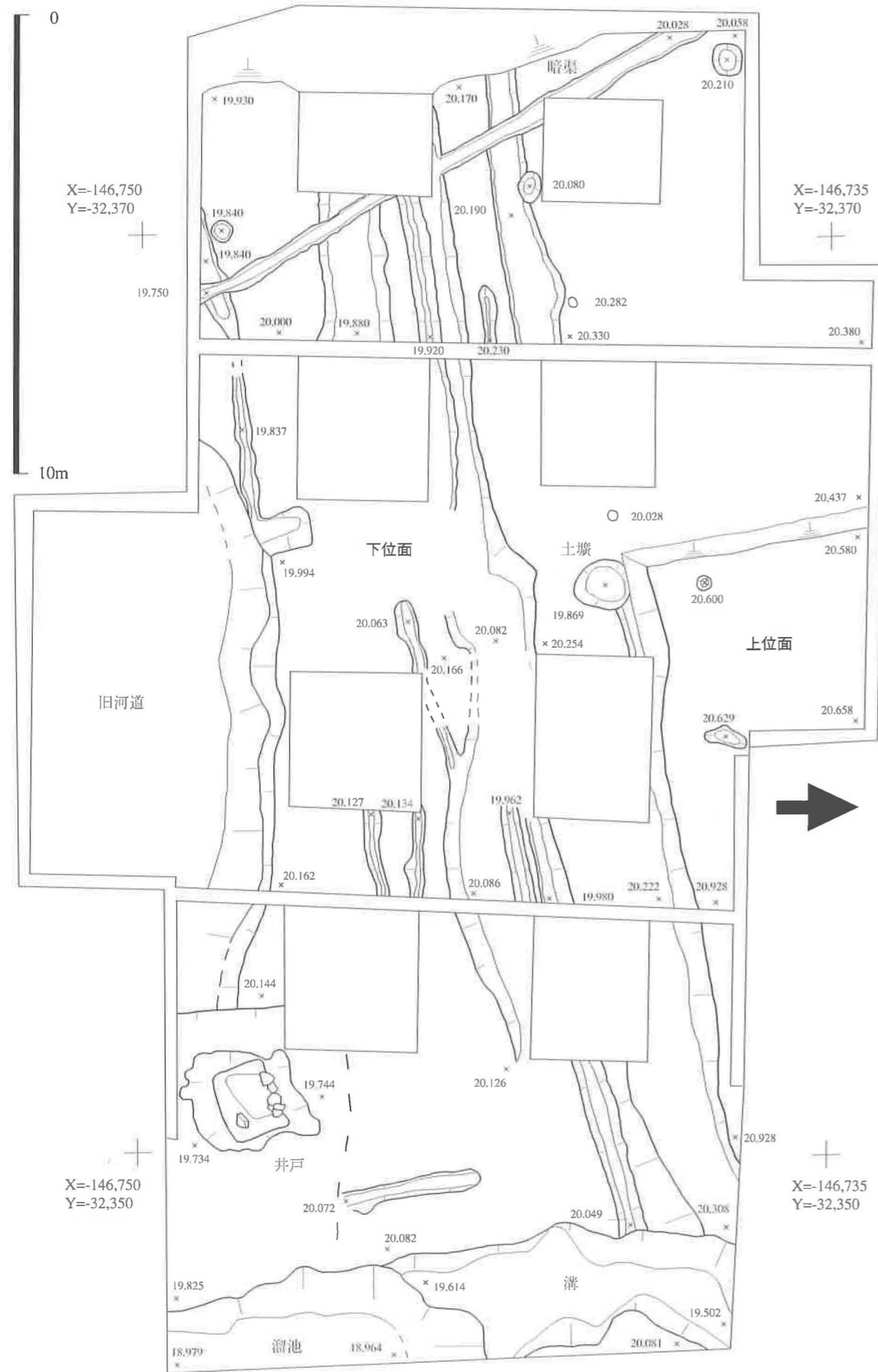


図2.9 古墳時代～江戸時代の遺構平面図 (1/200)

作土層である第6層を除去した後の南側下位面の標高は19.8～20.4mで、東西方向に延びる鋤跡が数条検出された。北東部の上位面の標高は20.6～20.9mで、段斜面付近での両面の比高差は60～70cmであった。また段斜面には後の棚田のように石垣は認められず、上位面西半は後世の棚田造成時に削平されていた。

下位面の西側では南南東～北北西に延びる暗渠を検出した。南壁断面では幅26cm、深さ15cmの堀方内に直径8cmの竹の痕跡が確認されたが、平面では竹を検出することはできなかった。この暗渠の堀方底部の標高は南南西が19.75mで低く、北北西が20.02mと高いことから、本調査地の北北西より南方を流下する河道へ排水するために構築されたものと推測される。

調査地東端では溝と溜池と思われる落込みを検出した。溝は北東方向から流入して溜池に繋がっており、本調査地北側の河道から溜池に導水するために開削されたものと推測される。しかし溝内には導水に伴う砂礫が堆積していたが、掘り直されることなく埋没しており、使用期間は溜池よりも短かったものと思われる。溝埋没後は耕作地が拡張されていた。溝は幅170～200cm、深さ80cmである。

溜池は西肩の一部が検出されただけで、平面形等は不明である。深さは100cmである。前記の溝が埋没した後も、この溜池は農業用水の供給源として機能していたようであるが、人為的に埋められ、耕作地の拡張が図られていた。図2.31、4・5の青磁碗・東播系鉢および土師器皿・瓦器椀の細片などの出土遺物から14世紀頃に埋没したものと推測される。

平安時代の住居関連遺構としてピット、井戸を検出した。

井戸は調査地内の東南部で検出された。調査最終日にこの井戸は崩壊したため掘方の図化は行えなかつたが、以下のようなことが指摘できる。

井戸の築造当初の構造は方形横板組み隅柱横棧止めである。隅柱は縦約8



図2.10 古墳時代～江戸時代の遺構 東から



図2.11 平安時代～江戸時代の遺構 北から



図2.12 暗渠断面



図2.13 井戸石組 南から



図2.14 井戸木枠 北から



図 2.15  
井戸内堆積層  
北から



図 2.16  
井戸完掘状況  
北から

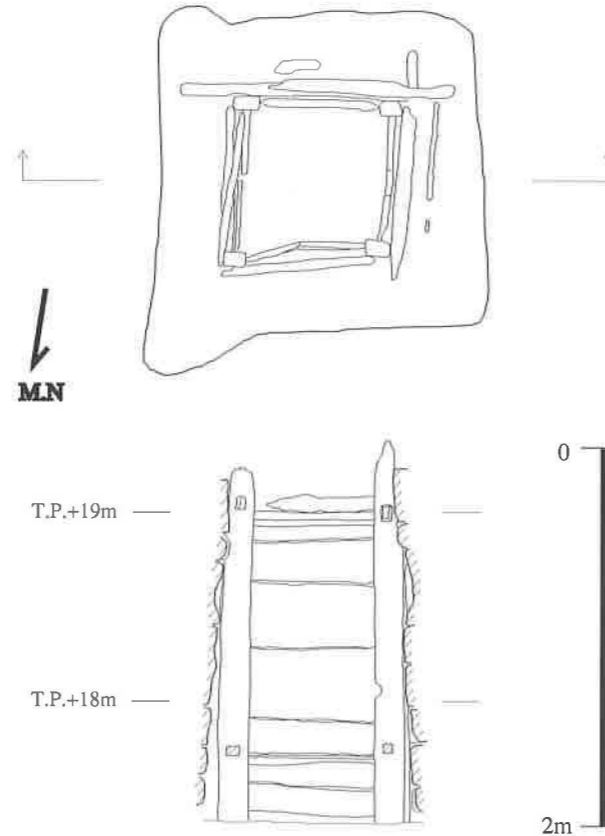


図 2.17 井戸実測図 (1/40)

cm、横約 12cm、長さ 200cm 以上の材で、約 80cm の間隔で立てられていた。井戸の底部は標高 17.37m で、図 2.22 に示した第 8-8 層からの湧水を利用して来たようである。井戸底部から約 40cm と 160cm にあたる隅柱の側面にはほぞ穴が穿たれ、一辺 4 cm 程の棧木を差し込んで 4 本の隅柱が固定されていた。井戸最上部の桝板は劣化と土圧によって倒壊していたが、東辺で 7 枚、西辺で 8 枚、南辺で 8 枚、北辺で 6 枚が原形を保って遺存していた。北側の井戸桝部材を例示すると、幅 8 ~ 32cm、長さ 88 ~ 136cm の板材と直径約 11cm、長さ 103cm の丸太材を粗く削って面取りしたものが 1 点混用されていた。桝材の両端は T 字状になるように上下からコの字状のえぐりが入れられ、相欠などの技法で桝材を組み合わせることにより、隅柱への荷重を軽減して井戸全体の構造が強化されていた。

またこの井戸は、最上部の木桝の劣化によって、図 2.13 に示したように石組みによる補修が行われていた。北辺には長辺 30cm 以下の石 6 個が 1 列で並んでおり、南東隅に相当すると思われる石も 1 個遺存していた。またこの補修時に井戸内の浚渫も行われたようで、底部に約 10cm の中粒砂～細礫混じりシルトの堆積層が認められただけで、それより上位はオリブ黒色の細粒砂～細礫混じり粘質土によって人為的に埋められていた。その埋土層からは元来桝に使用され、廃棄時に落とし込まれた石が数個出土した。井戸内からは図 2.37 ~ 47 に示したように黒色土器、須恵器、土師器、緑釉陶器などが出土し、10 世紀後半頃に埋没したものと考えられる。

図 2.18 井戸桝北側 4 段目



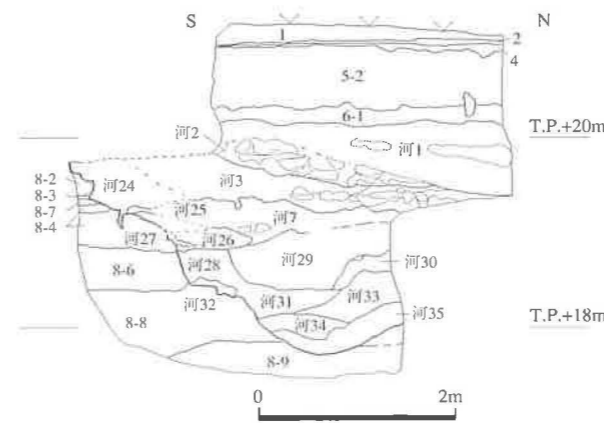
図 2.19 井戸東側上段桝木



ピットは本調査地内の西側でのみ検出された。上部を後世の耕地造成によって削平されていたが、中世～近世の棚田上位面に相当する範囲で 2 個、下位面に相当する範囲で 5 個が確認された。前記井戸の検出と考え合わせて、当時本調査地が居住域であったことが推測される。またピットの埋土はいずれも黒色の粘質土であった。ピット内からは平安時代の土師器細片が出土しており、井戸と同じく 10 世紀後半頃に埋没したものと思われる。

旧河道は調査地南部で北肩の一部が検出された。幅 550cm 以上、深さ 230cm を測る。断面の観察から人為的な河川管理の痕跡が確認された。旧河道の北岸は階段状に掘削され、北方へと拡幅されていた。最下層の旧河道内 35 層には、巨礫以下を含む中粒砂～極粗粒砂が堆積していた。旧河道内 34 層はシルトブロックを含む粗粒砂～シルト層で、北岸の拡幅時の廃土を旧河道内に投棄したものである。こうした投棄された層や河道内を浚渫した廃土層は、下流にあたる旧河道内の西側に厚く盛られていた。そうすることによって河道内の水流を弱めて貯水し、その水面へと降りるために北岸が階段状に掘削されたものと推測される。旧河道内 31 ~ 33 層はそうした状況下で東南東から堆積した層である。旧河道内 33 層堆積時は滞水状態にあったと思われ、植物遺体層中に粗粒砂～中粒砂のラミナが認められた。その後やや水の流れが速まって旧河道内 31・32 層が堆積し、河道内が浚渫され、旧河道内 30 層堆積後、再び河道内が掘削されたが旧河道内 29 層によって人為的に埋められていた。その後、河道内の階段状の北岸の崩落などによって旧河道内 28 層が堆積し、次いで緩やかな流れの中で旧河道内 26・27 層が、それより速い流れの中で旧河道内 7 層が形堆積し、旧河道内 1 ~ 3 層が投棄されて完全に埋没することとなった。

出土遺物が少ないために上記の復元過程の各段階に詳細な年代を与えること



8-8	10YR2/2 黒褐色シルト～細礫
8-9	10GY5/1 緑灰色上部はシルト、下部は中粒砂主体 中礫を含む
8-10	10GY3/1 暗緑灰色砂質礫
河 24	10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂～細礫混じりシルト
河 25	5GY4/1 オリブ灰色中粒砂～細礫混じり粘土 細粒砂～中粒砂のブロック含む
河 26	5GY3/1 暗緑灰色粗粒砂～細礫混じりシルト
河 27	5GY5/1 緑灰色・5Y3/1 オリブ黒色粘土
河 28	7.5GY4/1 暗緑灰色シルト～細粒砂
河 29	5G2/1 緑黒色砂質礫層 大礫以下を多量含む
河 30	7.5GY4/1 暗緑灰色細粒砂
河 31	10Y3/1 オリブ黒色シルト～細粒砂
河 32	7.5GY4/1 暗緑灰色細礫～中礫混じりシルト
河 33	7.5Y3/2 黒褐色植物遺体 細粒砂～中粒砂のラミナ
河 34	2.5Y3/3 暗オリブ褐色シルト～細粒砂 シルトブロック混じる
河 35	5GY3/1 暗オリブ灰色中粒砂～極粗粒砂 中礫以下を含む

図 2.22 旧河道東側断面図(1/80)

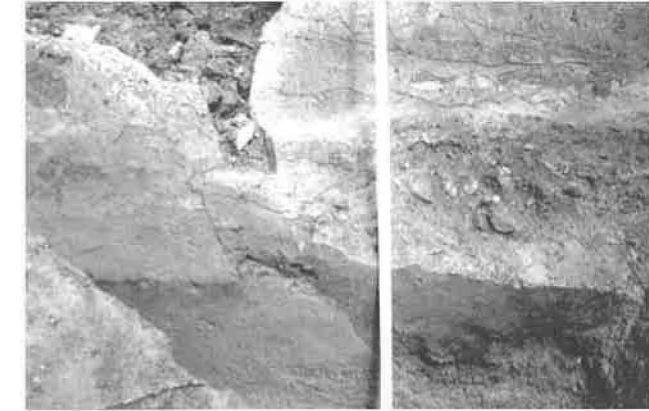


図 2.20 旧河道東側断面



図 2.21 旧河道南側断面

は困難であるが、図2.30、2・3などの出土遺物から、最終的には古墳時代後期の6世紀末～7世紀初頭頃に、この旧河道は人為的に埋没させられたものと考えられる。

### 2.2.3 出土遺物

今回の調査では古墳時代～江戸時代に至る土器、瓦、石器、金属器、動物遺体、植物遺体などが出土した。以下に実測図、拓影、写真を掲載したものを中心に、各層位、遺構ごとに出土遺物について簡潔に記しておく。

棚田造成時の盛土層である第5層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、土製品などに混じって、伊万里焼などの国産陶磁も出土した。そのため第5層の時期を江戸時代に比定できる。図2.27に示したように、土製品は土器の体部を円盤状に成形されており、直径は3.2cmと4cmのものが出土した。

耕作土層である第6層からは土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、製塩土器、瓦、金属器に混じって伊万里焼などの国産陶磁も出土した。しかし本層下面で検出された暗渠や鋤跡には国産陶磁は含まれていない。そのため第6層が耕作土として使用された時期は、中世～江戸時代の長期間にわたるものと考えられる。本層出土金属器は図2.23～26に示したような銭貨、鉄釘、鎌と思われる鉄製刃物の断片、銅製の煙管の吸い口である。出土銭貨は元豊通寶（1078年初鑄）ともう一点は不明である。これらの背面はいずれも平坦で、外縁の段が認められないことから模鑄銭であろう。

旧河道内からは図2.29・30に示した土師器、須恵器のほか製塩土器、馬歯が出土した。3の須恵器高杯は長脚2段透かしの脚部で、たちあがりは低く扁平な杯部が伴う。こうした特徴を持つ須恵器の出土から、旧河道の埋没年代は古墳時代後期の6世紀末～7世紀初頭頃と推測される。

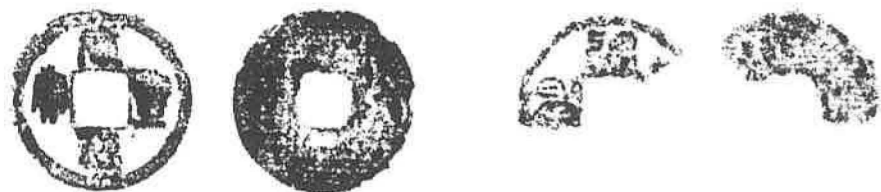


図2.23 第6層出土銭貨拓影



図2.24 第6層出土銭貨



図2.25 第6層出土金属器



図2.26 第6層出土金属器



図2.27 第5層出土土製品

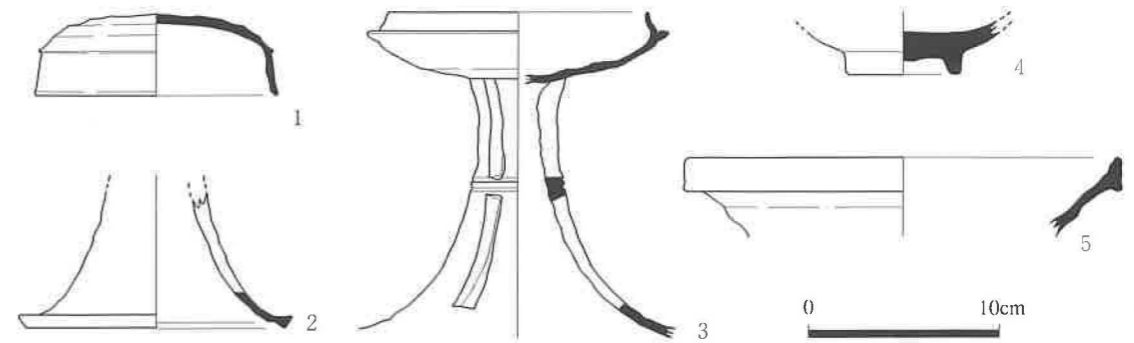


図2.28 旧河道・溜池出土遺物実測図



図2.29 旧河道出土須恵器



図2.30 旧河道出土須恵器・土師器

溜池からは図2.31に示した青磁碗、東播系鉢の外に土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。5の鉢の口縁部が緩やかに外反し端部が上下に拡張されるとい特徴や、相伴した土師器皿・瓦器碗細片などからして、この溜池の埋没年代は14世紀頃と推測される。

第7層からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、製塩土器、瓦が出土した。土師器は図2.34・35に示した皿・碗・杯・蓋のほか甕・羽釜の細片も出土した。須恵器は図2.33・34に示した杯・長頸壺のほか甕・杯蓋の細片も出土した。図2.35に示した黒色土器碗12は、内面には全体に炭素が吸着している。瓦は平瓦に混じって図2.36に示した軒丸瓦が2点出土している。本調査地の北東370mに鎮座する石切劔箭神社境内で実施された法通寺跡の発掘調査では、183点の軒丸瓦が出土しており、そのうちの3点が直径13.3cmの三重圈文軒丸瓦であった。今回出土の軒丸瓦は復元直径13.8cmと11.2cmで大きさは異なるものの、同じく重圈文である点は注目される。

井戸内からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、製塩土器、瓦、植物遺体が出土し、堀方からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、製塩土器、瓦が出土した。井戸内出土の土師器では皿・杯類が多く出土し、甕や羽釜の細片が混入する。図2.38に示したように皿もしくは杯の底部に穿孔の痕跡が認められるものもある。17・19の皿は外面下半はオサエ、口縁部は横ナデによって外反し、口縁端部は内側に丸められている。17の器壁は2.5mmと薄い。色調はいずれも白色系である。須恵器は図2.39に示した杯・蓋・長頸壺のほか



図2.31 溜池・土壙出土土師器・陶器・青磁

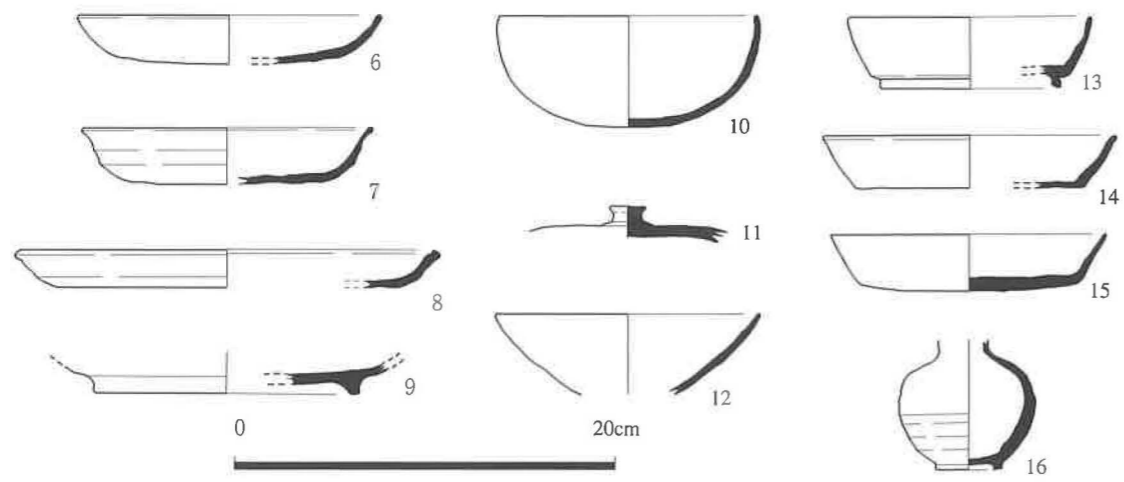


图 2.32 第 7 層出土遺物実測図

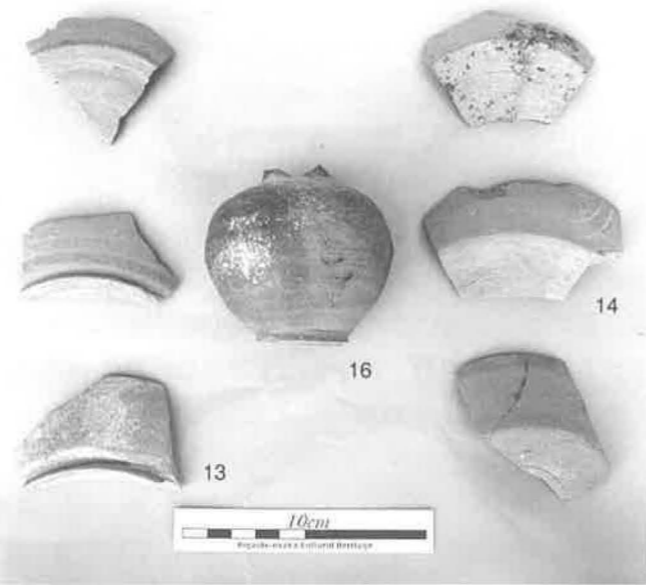


图 2.33 第 7 層出土須恵器



图 2.34 第 7 層出土須恵器・土師器

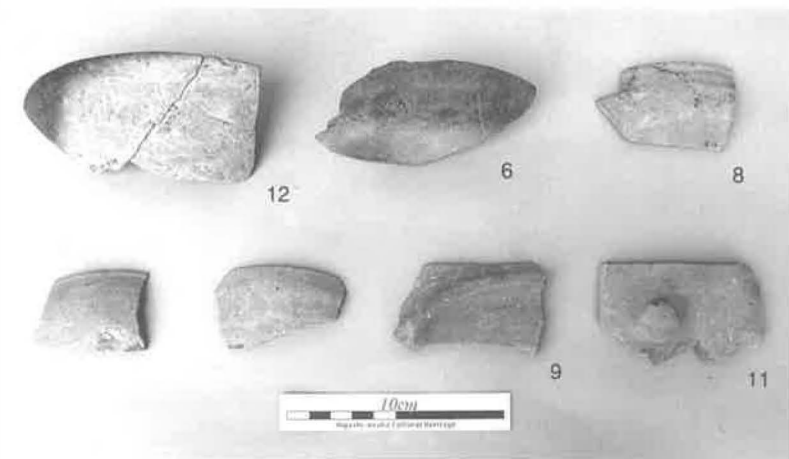


图 2.35 第 7 層出土土師器・黒色土器



图 2.36 第 7 層出土瓦

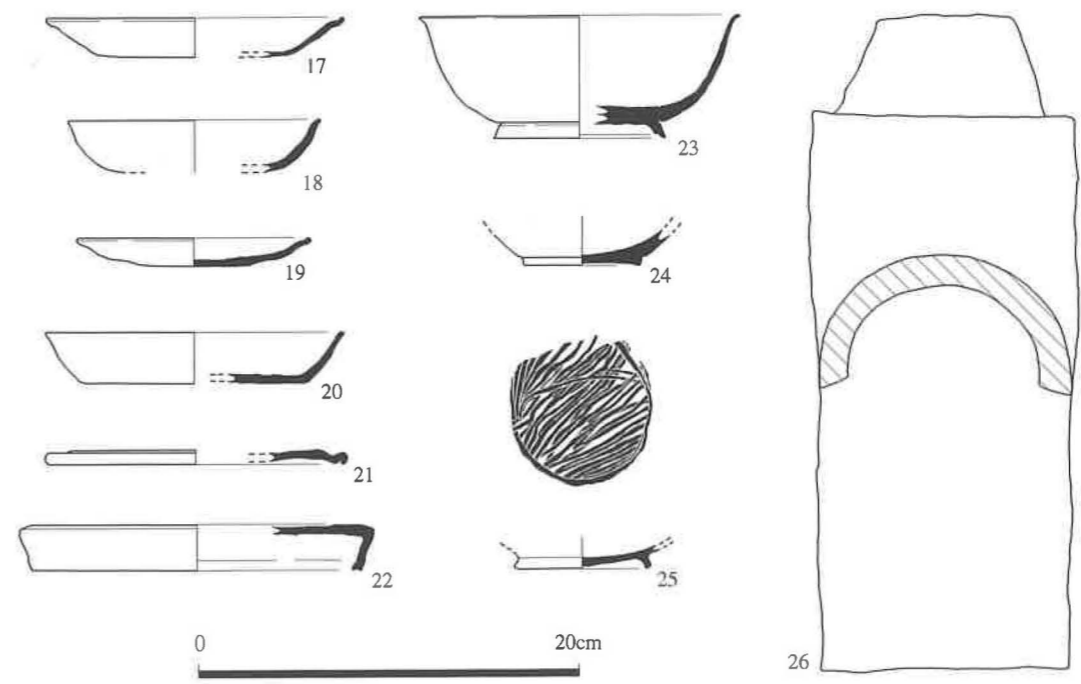


图 2.37 井戸出土遺物実測図



图 2.38 井戸出土土師器

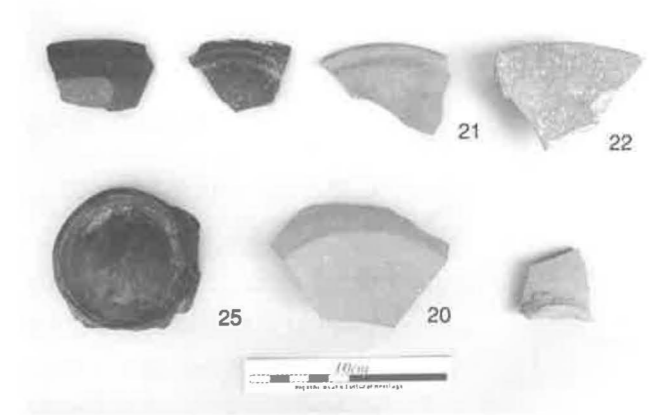


图 2.39 井戸出土須恵器・黒色土器



图 2.40 井戸・包含層出土緑釉陶器

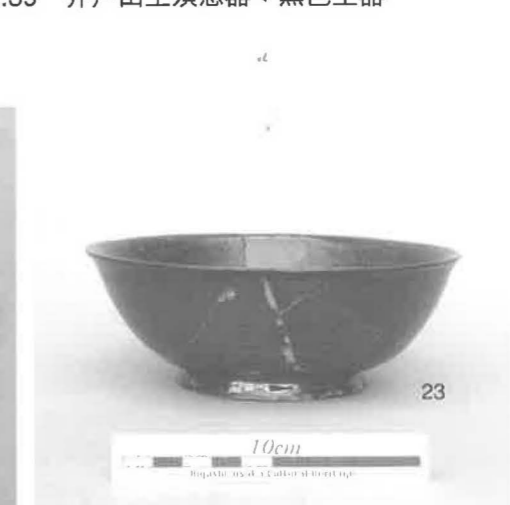


图 2.41 井戸出土緑釉碗



图 2.42 堀方出土瓦



図 2.43 井戸出土石器



図 2.44 井戸出土モモ



図 2.45 井戸出土クルミ



図 2.46 井戸出土ブナ科



図 2.47 井戸出土ヒシ

に甕の細片が出土した。図 2.39 に示した黒色土器碗は、いずれも内外面に炭素を吸着させたタイプである。これらの黒色土器碗と 17・19 の土師器皿の特徴から考えて、この井戸は 10 世紀後半頃に廃棄されたものと推測される。図 2.40・41 には緑釉陶器を示した。23 の碗および図 2.40 中の碗口縁部の細片 2 点と有段輪高台の細片 1 点が濃緑色、その他は淡緑色の色調を呈する。なお濃緑色の 4 点と、24 を含む円盤状高台の細片 2 点が井戸内から出土し、その他は包含層から出土した。また井戸内からは図 2.43 に示した石器も 1 点出土した。両側面には幅 7 mm 以下の溝が数条刻まれている。こうした溝に滑り止めや固定のために、植物の蔓などが巻き付けられたものと推測される。井戸堀方からは図 2.42 に示した丸瓦が出土した。凹面には布目痕、凸面には縄目痕が認められる。

また井戸内からは人工的な遺物ではないが、当時の人々の食生活や自然環境を探る手がかりとなる植物遺体が出土している。図 2.44～47 に示したようにモモ・クルミの核、ドングリと通称されるブナ科の堅果、ヒシの子葉などが検出された。

### 2.3 まとめ

最後に、今回の調査で検出された遺構を基に、調査地内における土地利用形態の変遷を記してまとめとする。

本調査地内で検出された最も古い遺構は旧河道である。その開削時期は不明

であるが、古墳時代後期には人為的に埋められていた。この旧河道は数回浚渫され、また北肩は階段状に掘削されており、そうした廃土を旧河道内に投棄して流れをせき止め、貯水を行うという河川管理が行われていた。当該期の住居関連遺構は検出されなかったため、ここでは古墳時代の本調査地を利水の場と捉えておこう。

次の遺構が確認される時期は平安時代である。ピット、井戸が検出されていることから、当該期の本調査地が居住空間であったことが判明する。遺存していたピットの分布を見る限りでは、建物は調査地の西半に広がっていたようである。しかし 10 世紀後半頃には建物や井戸は廃絶する。

その後、本調査地は耕作地として利用され現代に至る。まず本調査地が耕地として造成された段階では、南北方向を基軸とする棚田が造成される。これは南方を流下していた旧河道の浸食によって形成された標高差を効率的に利用しながら、ベース層を削平することによって造成される。また調査地東端には、溜池と導水のための溝が掘削されるが、埋め戻されて耕作地の拡張が図られる。こうした南北方向を基軸とした棚田形態による耕作地は、江戸時代まで継続される。江戸時代に入ると、その詳しい時期は不明であるが、棚田の再造成が行われ、これまでの南北方向から東西方向を基軸とする棚田に変化する。前代の棚田下位面には生駒山側の東方から順次客土が盛られ、棚田斜面には石垣が組まれる。こうした東西方向を基軸とする棚田形態による耕作地は、近代まで継続される。その後、中位面と下位面に客土が盛られ、本調査地は平坦な耕作地として造成され近年に至った。

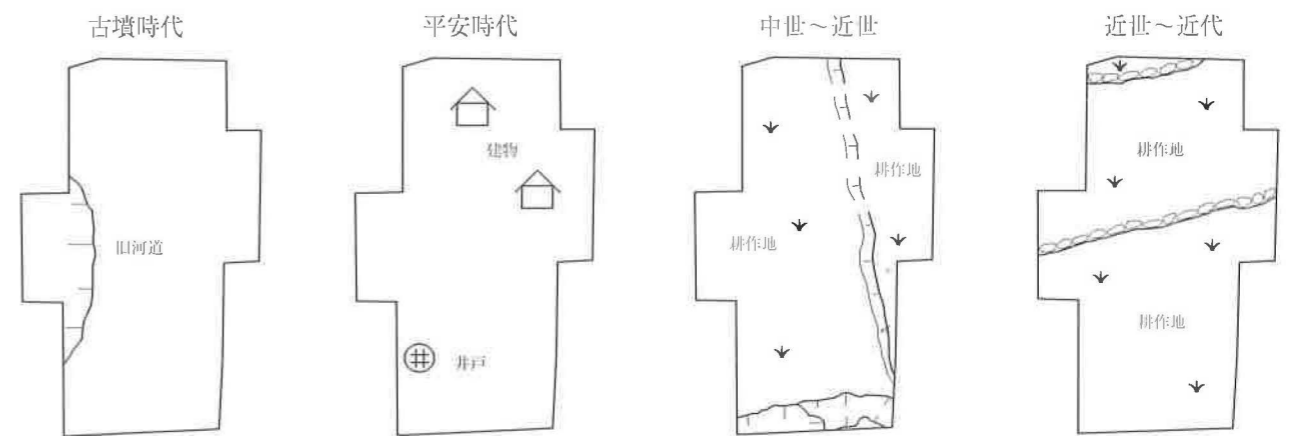


図 2.48 遺構変遷模式図

注

- (1) 中西克宏「神並遺跡第 11 次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報集—1998 年度(2)—』財団法人東大阪市文化財協会 1999
- (2) 『発掘 20 年のあゆみ』東大阪市教育委員会、財団法人東大阪市文化財協会 1987

- (3) 西口陽一、宮崎泰史『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要I』大阪府教育委員会 1984
- (4) 松田順一郎、中西克宏『神並遺跡III』東大阪市教育委員会、財団法人東大阪市文化財協会 1988
- 西口陽一、宮崎泰史『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要III』大阪府教育委員会 1986
- 松田順一郎「神並遺跡北部の平安時代掘立柱建物跡と中世耕作地跡—共同住宅建設に伴う神並遺跡第10次発掘調査報告—」『神並遺跡発掘調査報告集—第9・10・18・19・22次調査—』財団法人東大阪市文化財協会 2000
- 中西克宏『神並遺跡XIV—第二阪奈有料道路建設に伴う神並遺跡第14次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会 1996
- 池崎智詞「神並遺跡第18次発掘調査報告」『神並遺跡発掘調査報告集—第9・10・18・19・22次調査—』財団法人東大阪市文化財協会 2000 など
- (5) 松田順一郎「神並遺跡南西端の中世堤状遺構とその後の耕作地跡—共同住宅建設に伴う神並遺跡第9次発掘調査報告—」『神並遺跡発掘調査報告集—第9・10・18・19・22次調査—』財団法人東大阪市文化財協会 2000
- 井上伸一「神並遺跡第22次発掘調査報告」『神並遺跡発掘調査報告集—第9・10・18・19・22次調査—』財団法人東大阪市文化財協会 2000
- (6) 金村浩一『神並遺跡第17次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 2001
- (7) 下村晴文『法通寺』財団法人東大阪市文化財協会 1985

## 報告書抄録

ふりがな ふなやまいせきだいさんじ・こうなみいせきだいにじゅうさんじはつくつちようさほうこくしよ  
 書名 船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書  
 副書名  
 巻次 シリーズ名 シリーズ番号  
 編著者名 別所秀高  
 編集機関 財団法人東大阪市文化財協会 発行機関 財団法人東大阪市文化財協会  
 発行年月日 2001.12.31 作成法人ID 42710 郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346  
 住所 東大阪市荒川3-28-21 ふりがな ふなやまいせき 遺跡名 船山遺跡  
 ふりがな ひがしおおさかしろくまんじさんちようめ  
 遺跡所在地 東大阪市六万寺3丁目 635-1,636-1,642番地 市町村コード 27227 遺跡番号 88  
 北緯 34.38.56 東経 135.38.44 調査期間 1994.02.11-1994.06.06 調査面積 494.2m<sup>2</sup>  
 調査原因 マンション建設  
 種別 集落/谷  
 主な時代 縄文/弥生/古墳/平安  
 遺跡概要 縄文後期-谷-縄文土器/弥生古墳-溝-弥生土器/古墳後期-土坑-須恵器+土師器/平安初頭-土坑+ピット+貯蔵施設+井戸-土師器+墨書土師器杯+須恵器+釣瓶+曲物底板/平安末-瓦器  
 特記事項 9世紀前半の木柵井戸内から「米」印や「×」印を墨書した土師器杯が出土。同じ井戸から釣瓶がみつかった。

ふりがな ふなやまいせきだいさんじ・こうなみいせきだいにじゅうさんじはつくつちようさほうこくしよ  
 書名 船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書  
 副書名  
 巻次 シリーズ名 シリーズ番号  
 編著者名 井上伸一  
 編集機関 財団法人東大阪市文化財協会 発行機関 財団法人東大阪市文化財協会  
 発行年月日 2001.12.31 作成法人ID 42710 郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346  
 住所 東大阪市荒川3-28-21 ふりがな こうなみいせき 遺跡名 神並遺跡  
 ふりがな ひがしおおさかしにしいしきりちよういっちようめ  
 遺跡所在地 東大阪市西石切町1丁目 1-1,5-1,6,7-3 市町村コード 27227 遺跡番号 23  
 北緯 34.40.35 東経 135.35.49 調査期間 1999.07.08-1999.08.30 調査面積 400m<sup>2</sup>  
 調査原因 共同住宅建設  
 種別 集落/耕作地  
 主な時代 古墳/平安/中世/近世  
 遺跡概要 古墳時代-旧河道-須恵器+土師器/平安時代-ピット+井戸-須恵器+土師器+黒色土器+緑釉陶器+瓦/中世-棚田+溜池+溝+土壙+暗渠+鋤跡-土師器+陶器+磁器+瓦+銭貨/近世-棚田+石垣+溝-陶器+磁器+鉄+煙管  
 特記事項

---

船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書

発行年月日 2001年12月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

印刷 株式会社ミラテック

〒534-0025 大阪市都島区片町2丁目9-9

---